鴨東通信

秋

2014.10 No.95

◉日常語のなかの歴史9
しょぎばらい【暑気払】 米澤洋子

◉てぃーたいむ
世界中にインスピレーションを与え続ける絵 井手誠之輔・北澤菜月・谷口耕生
鉛の道をたどれ——別府大学文理融合の軌跡 平尾良光・飯沼賢司

◉エッセイ
京都六角住心院 首藤善樹
幕末・維新期における英式兵制 竹本知行

◉史料探訪57
並河靖之七宝記念館——並河靖之と京都七宝の記録 武藤夕佳里

思文閣出版

別府大学文化財研究所企画シリーズ「ヒトとモノと環境が語る」③

大航海時代の日本と金属交易

平尾良光・飯沼賢司・村井章介編

分析科学と文献史学の融合を目指すシリーズ第三弾。最新の鉛同位体比分析の成果から、日本の銅生産や中世～近世日本の金属流通のありよう、南蛮貿易の意義などに新たな視角を提示する。巻末に戦国時代関連資料の鉛同位体比一覧を掲載。

目　次

日本中世に使用された中国銭の謎に挑む　（飯沼賢司）
　コラム①　唯〝錫〟史観　（黒田明伸）
15・16世紀海洋アジアの海域交流　（村井章介）
　コラム②　琉球王国のガラスはどこで生産されたのか？　（稗田優生・魯禮玹・平尾良光）
鉛玉が語る日本の戦国時代における東南アジア交易　（平尾良光）
　コラム③　16世紀後半のアユタヤ交易と日本　（岡美穂子）
　コラム④　タイ ソントー鉛鉱山　（平尾良光・魯禮玹・土屋将史・ワイヤポット・ボラカノーク）
鉛の流通と宣教師　（後藤晃一）
　コラム⑤　サンチャゴの鐘　（平尾良光）
　コラム⑥　コンテナ陶磁のもつ意味　（川口洋平）
金銀山開発をめぐる鉛需要について　（仲野義文）
江戸時代初期に佐渡金銀山で利用された鉛の産地　（魯禮玹・平尾良光）
大砲伝来　（上野淳也）
　コラム⑦　マニラ沖に沈んだスペイン船サン・ディエゴ号が語るもの　（田中和彦）
資料　戦国時代関連資料の鉛同位体比一覧　（西田京平・平尾良光）

【10月刊行】　▼B5判・二一〇頁／本体三、五〇〇円

別府大学文化財研究所企画シリーズ「ヒトとモノと環境が語る」②

キリシタン大名の考古学

別府大学文化財研究所・九州考古学会・大分県考古学会編

大分の豊後府内遺跡や大村氏の城館跡、島原の原城跡など、いわゆるキリシタンにかかわる遺跡の発掘が進み、研究は新しい段階に入っている。文献史学や分析科学などの成果を融合し、新しいキリシタン考古学論・流通論など、新たな研究手法を提示する。

目　次

◎宣教師の活動とキリシタン大名の町◎
キリシタン遺跡から見たキリシタン宣教　（五野井隆史）
　◇コラム　高槻城キリシタン墓地　（高橋公一）
巡察師ヴァリニャーノの見た豊後「府内」　（坂本嘉弘）
　◇コラム　豊後府内のキリスト教会墓地　（田中裕介）
肥前大村の成立過程　（大野安生）
豊後府内の成立過程　（上野淳也）
　◇コラム　肥後八代・麦島城と小西行長　（鳥津亮二）
◎キリシタン遺物は語る◎
豊後府内出土のキリシタン遺物　（後藤晃一）
　◇コラム　博多出土のキリシタン遺物　（佐藤一郎）
原城出土のキリシタン遺物　（松本慎二）
　◇コラム　天草のキリシタン遺物　（平田豊弘）
キリシタン考古学の可能性　（今野春樹）
　◇コラム　キリシタン生活を支えたメダル　（デ・ルカ・レンゾ）
南蛮交易と金属材料　（魯禮玹・西田京平・平尾良光）
　◇コラム　石見銀山と灰吹法　（仲野義文）
大航海時代における東アジア世界と日本の鉛流通の意義　（平尾良光・飯沼賢司）

【今秋増刷決定】　▼B5判・一七八頁／本体三、八〇〇円

しょきばらい【暑気払】

「暑気払」とは夏の暑さを払い除けるために、何らかの方法を講ずる意味である。さしずめ現代は、ビールや冷酒で一時暑さを忘れるか、滋養のある食品で英気を養うといった意味合いが強い。しかし医療体制の不備な前近代には、暑気払は、霍乱・中暑と称された日射病や胃腸障害などに対処すべく薬を服用することをいった。その薬とは何か。

天明三年（一七八三）刊の俳諧集『華実年浪草』は、暑気払の薬として香薷散なる薬の処方を記載する。香薷とはシソ科の一年草ナギナタコウジュである。香薷散は干した香薷の葉と花穂の粉末に、厚朴・陳皮などを調合した漢方薬である。すでに、寛文七年（一六六七）刊の同『せわ焼草』は、香薷の採取を五月と解説する。つまり香薷散は暑気払の薬として、夏の季語になるほど江戸の市井に定着していたのである。

さて香薷散の歴史をさらに遡っていくと、一人の興味深い人物に行き当る。

それは山科言継（一五〇七～七九）、戦国の乱世を生きた京都の公家である。彼は医薬に精通し、禁裏から近隣住人まで、貴賤を問わぬ多くの人々に自らの処方薬を融通した。彼の日記『言継卿記』には、自身が手がけた、優に百を超える薬名が記されている。中でも、夏になると「暑気候間」と所望され、諸人に遣わした薬が香薷散である。初出の天文十三年（一五四四）以来、言継は夏期には決まって、家人・縁者は勿論、禁裏の女房衆や公家衆のために、時には京を離れる知人や僧への餞別に香薷散を調合した。

言継調合の香薷散は次第にその名を高め、夏の定番薬となる。永禄六年（一五六三）には、当家の〝夏の贈答品〟として、なんと五十人もの知己に配られている。加えて言継は〈香薷散〉なる刻印や薬包の封印まで誂えている。まさに山科家を代表する暑気払の薬と言えよう。

やがて香薷散は前述のごとく、暑気払の良薬として裾野を広げ、今も「歳時記」にその名を留めている。

何くれと母が思や香薷散　　虚子

（米澤洋子・京都橘大学非常勤講師）

日常語の歴史 なかの 9

◎日常語のなかで、歴史的語源やエピソードを取り上げ、研究者が専門的視野からご紹介します。

●大徳寺伝来五百羅漢図とは

谷口：「大徳寺伝来五百羅漢図」（以下大徳寺本）は、中国浙江省天台山の石橋に示現するという五百人の羅漢の姿を濃厚な彩色と巧みな水墨技法によって描くもので、宋代仏画を代表する名品です。

制作当初は、一幅に五人の羅漢を配する形で一〇〇幅に計五〇〇人の羅漢を描いていたとみられます。大徳寺に現在伝わるのは八二幅で重要文化財に指定されています。明治時代に日本を離れて米国に渡った一二幅が、ボストン美術館に一〇幅、フリーア美術館に二幅所蔵されています。

井手：早くから名品として知られ、非常に有名な絵なのですが、なかなか研究は進んでいませんでした。とくに、本図の資料的な価値を高めている銘文については、その写真撮影はもちろんのこと、現存する九四幅のうち何幅に銘文が記されているのかという基礎的な確認作業を行うことさえ難しい状況でした。

転機になったのが、二〇〇五年度からはじまった、中国浙江省の港町寧波をテーマとする学際的研究プロジェクト・文部科学省特定領域研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成――寧波を焦点とする学際的創成――」（通称にんぷろ）でした。寧波をひとつのゲートウェイと考えて、日中間のさまざまな文化交流、あるいはそのひろがりを東アジアからグローバルな観点で見ていこうという、大きな共同研究プロジェクトです。その文化交流研究部門の研究班「寧波をめぐる絵画と人的ネットワーク」のメンバーを中心に、寧波周辺で生み出された絵画に関する調査・研究が精力的に進められていきました。

●共同研究プロジェクトの成果

谷口：奈良国立博物館（奈良博）にも、寧波にかかわる仏画が少なからず所蔵されているということもあって、私もにんぷろのメンバーに入れさせていただいていました。どういうかたちで研究プロジェクトに寄与できるのかということを思いあぐねている中で、奈良博で大徳寺伝来五百羅漢図を二〇幅お預かりしているということもあったので、何とか本図を全部展示する機会を得られないかと思ったのです。

北澤：展観会への全幅出陳は、本図のカラー図

てぃーたいむ

世界中にインスピレーションを与え続ける絵

井手誠之輔（いでせいのすけ）
（九州大学大学院 人文科学研究院教授）

北澤菜月（きたざわなつき）
（奈良国立博物館学芸部 研究員）

谷口耕生（たにぐちこうせい）
（奈良国立博物館学芸部 保存修理指導室長）

版を図録に掲載させていただく機会にもなりました。研究者の間では、ものすごく重要な作品だという認識はあったのですが、すべてが公開されているわけではなく、小さいモノクロ図版でしか見ることができなかったので、ぜひカラーで図録に掲載したいという思いもありました。

谷口：二〇〇九年七月から八月に奈良博で「聖地寧波」展を開催し、大徳寺所蔵分八二幅に加え、ボストン美術館から二面の里帰りも実現しました。そして、その機会に一番重要な金泥銘文の調査ができるのではないかということで、調査を事前にさせていただいて、寧波展の図録にも途中報告的な成果を反映しました。

井手：われわれ美術史研究者ががんばってもできないのが、銘文を可視画像化するというところで、これには東京文化財研究所（東文研）の城野誠治さんの役割が非常に大きいのです。城野さんの仕事については、私もかかわった、東文研編『Light & Color――絵画表現の深層をさぐる』（中央公論美術出版、二〇〇九年）を見ていただければよくわかりますが、最先端の光学機器を使って、文化財それぞれによって最適な手法を見極め、さまざまな光に対する物質の反応を緻密に計算して映像化していくということをされてきました。

谷口：奈良博と東文研は、二〇〇四年度より共同研究の協定を結んで、古代・中世の仏教絵画や絵巻物を主な対象として、最新の分析機器・情報機器を用いた光学的調査やデジタル画像データの作成を継続的に実施してきました。その流れの中で、大徳寺本の銘文を可視化できるのではないかということをずっと考えていました。実際に、寧波展の前にボストン美術館で行ったにんぷろの調査で鮮明な画像が得られたということで、これをすべての幅で同じように実践しようということになったのです。

　その成果はめざましいもので、大徳寺本全九四幅のうち四八幅から、従来全く存在の知られていなかったものを含む金泥銘文の存在を確認し、そのすべての画像化に成功しました。なにより大徳寺さんのご理解と全面的なご協力があってのことですが、その上で、にんぷろと聖地寧波展、東文研との共同研究と、いろいろなプロジェクトがうまいかたちで結実した成果です。

井手：寧波展会期中に行った、にんぷろと奈良博の共催による国際学術シンポジウム「舎利と羅漢」も画期的でした。二日目のセッションでは、大徳寺本研究の第一人者であるプリンストン大学名誉教授方聞（Weng Fong）先生による基調講演に続いて、共同研究の成果も踏まえたパネルディスカッションが行われました。約二〇〇人収容できる会場が満杯で、そのうち八〇名近くが海外からの参加者でした。奈良博・東文研、それから世界に広がっている研究者が、一気に大徳寺五百羅漢図で有機的に繋がりをもって協力できた幸せな一〇年でした。

谷口：共同研究の成果を、二〇一一年三月に『大徳寺伝来五百羅漢図　銘文調査報告書』として刊行し、大徳寺本の金泥（きんでい）銘文および画絹（がけん）に関する詳細な画像データとともに、その分析を通じて得られた知見に基づく六本の最新論文を掲載しました。その反響は

大きく、日本国内はもとより中国・台湾・韓国の東アジア諸国、さらには欧米の研究者の間で、大徳寺本の研究や大徳寺本から宋代の社会・文化を読み解く研究が活発化しています。

今回の出版は、前報告書刊行後に実施した追加調査の成果も交えつつ、新たに各幅の主題解釈や画絹の組成に関する所見などを加えて、判型も大きくして、大徳寺本の総合的な調査報告書となったのです。

●銘文からわかること

――銘文によってどういうことがわかるのですか？

井手：銘文のほとんどは、当時明州と呼ばれていた寧波の東に位置する東銭湖周辺に居住する人々が、先祖の追善供養、あるいは亡魂の極楽浄土への往生、さらに一族の安寧を祈って、恵安院という寺院に五百羅漢図を施入したことを伝えています。

社会史的側面からいいますと、みんなでお金を出し合って橋を架けたり碑文を造ったり――これを同心合力といいますが――そういう通常の政治の表舞台に出てこない一般の人たちの日常の信仰生活とか作善の行いのようなものが表れています。これはたまたま仏画の事例ですが、ほかにも経典の事例や、あるいは慈善事業で橋を造ったときの結縁銘だとか、いろんなものを集めていくと、すごい研究ができると思います。

左から井手氏・谷口氏・北澤氏

いずれにしても、大徳寺本は、仏画と儀礼、儀礼の場と地域社会、地域社会とローカルエリート、ローカルエリートと中央とのネットワークなど、今日的な課題となっている宋代史研究のさまざまな問題へと波及していく、多角的な観点から検証しうる希有な視覚資料です。

谷口：同心合力ということで言うと、おそらく仏教には最初からそういう考え方があるのだと思うのです。東大寺の大仏を聖武天皇が発願したときにも、一握りの土や草でもみんなで合力してそれを集めることによって大仏が作られるということの意義を重要視する。大仏を聖武天皇が一人で作るのではなくて合力させる、それが王の徳であるというということにもなるのです。

大徳寺本にしても、一人の権力者だけで全部作るのではなくて、浙江周辺の有力な在地の人たちが一緒に結縁するのです。その中心には有力な政治家などがかかわっている可能性があるのですが。

井手：大徳寺本の裏側に隠れたパトロンがいるのだとすると、その当時の宰相の史浩ですとか、あるいは東銭湖の浚渫事業を行った魏王趙愷という存在が見え隠れするということだけは感じてい

ます。ただ、それがストレートには銘文に顔をのぞかせないのです。この考えがうまくいけば、大徳寺本では結縁の半分くらいは地域の人で、あと半分は権力者、ということになるのですが。

北澤：非常に重要であろうと思われる幅に限って銘がないのが示唆的ですね。

●いつ・なぜ日本に渡ってきたのか

――寧波という場が重要な意味を持つのですね。

谷口：鎌倉時代東大寺の復興に使われた石材とか工人さんたちもおそらく東銭湖にかなり近いところからやってきているのです。一方で東大寺復興のリーダーである重源（ちょうげん）上人が、東銭湖からほど近い阿育王寺の復興にかかわっています。後白河院がお金を出して、東大寺の復興に使われたのと同じ周防の国の木を中国に運び、それが寧波の阿育王寺、あるいは天童寺の復興に使われました。中国ではあれだけの良材はなかなかとれないらしいのです。

井手：蒙古襲来をもって、そのようなネットワークも断たれます。

谷口：日中交流のいちばんビビッドな時代に描かれた大徳寺本が、いつ日本に入ってきたのかというのは非常に大きな問題です。どうして重要なものが現地を離れて日本に入ってきたのか。

井手：近藤一成先生も本書所収の論文で触れられていますね。私もシンポジウムでは少し申し上げたのですが、東銭湖の浚渫事業とかかわって、水のめぐみに感謝して人々が仏画を制作して寄進したにもかかわらず、浚渫事業が大失敗だったのです。失敗したからこの絵には霊力がないと批判された可能性もあります。蘭渓道隆（らんけいどうりゅう）の周辺が日本に持って来たとすると、描かれてから意外と早いのです。

谷口：本当にそうかはわからないですけれども、フェノロサはそういう言い伝えを聞いているのです。一二四六年、蘭渓が日本に来た年に将来されたという伝承を書いています。実際に蘭渓が持ってきたかどうかはわからないのですが、蘭渓があの辺りにいたことは間違いない。

北澤：それにしても本当に水の描写が多いですよね。解説を書いていて改めて思ったのですけれども。

井手：天官・地官はなくて水官や水神しか出てこないですね。

●世界的な評価

――絵の方は、林庭珪と周季常という二人の画家とその工房によって描かれています。

北澤：すでに方聞先生が指摘されていますが、大徳寺本の羅漢の姿の多くは、これより昔の羅漢図を転用しています。周と林の創意によって、描かれたものではないのです。

その傾向は林庭珪の方が強いです。林庭珪は、おそらくは北宋以前にさかのぼる、伝統的な既存の羅漢図像を用いて、画面の多くを構成していったのです。仏画師として至極正統的です。

それに引き替え周季常というのは、いかにも現世の人を肖像画として描き込んだり、この人たちがこの図像の中に別にいなくて

もいいものを、と思うような画家の姿や勧進僧など、寄進者や制作者の意図を汲んだと思われるものを描き込む傾向がみられます。そういう現場で応用を利かせられる立場というか、より深くこのプロジェクトにかかわっているというふうにみられます。

井手：絵としては林庭珪の色はきれいですよね。だけどアメリカで一番評価を受けているのは、周季常の線による表情、空間の表現です。フェノロサが周季常の表現の力に悩殺されたわけです。林庭珪的な着彩の表現は、シエナ派とか西洋の色表現にも似た伝統がありますが、周季常の線による表情とか人体表現は、西洋にない伝統としてフェノロサが絶賛しています。

北澤：一八九四年（明治二七）にアメリカでフェノロサが開催した展覧会の図録ですね。ものすごく誉めています。

井手：これは本当のことか…というように大袈裟に記してありますね。大徳寺本を美術史的な対象として最初に注目したのは残念ながらアメリカの人たちでした。

北澤：アメリカにとっては衝撃的だったということですよね。東洋美術史が見直されるきっかけとなったのです。

井手：ユキオ・リピット先生が、本書でフェノロサ以来の大徳寺本の世界的な評価についてまとめられています。フェノロサの友人のバーナード・ベレンソンは、ルネサンス絵画のカウンターパートとして大徳寺本の宗教性と線描の妙技を激賞し、二〇世紀初頭のロジャー・フライは、大徳寺本に代表される宋代の絵画に見られる線の表現力などをとりあげて、「柔軟性」や「生命力」を生み出す「究極の近代性」に通じるものを見いだしました。そうしたときに、セザンヌはどうだとかゴッホはどうだとか、西洋の近代絵画を評価する視点を生み出すきっかけとなったわけです。大徳寺本からセザンヌに繋がってくると思うとちょっとビックリしてしまいますが、当時のフォルマリストたちからも大徳寺本は評価をうけているわけです。

谷口：ただ、世界的な評価も大切ですが、やはり日本国内でも評価を受けてきたわけです。東福寺の画僧で明兆（みんちょう）という偉大な画家が、おそらくは大徳寺本から直接イマジネーションを受けて、五〇幅のかたちで描いた五百羅漢図が、東福寺などに伝来しています。この明兆本自体が日本ではたくさん写されて、五百羅漢図のひとつの規範になっていくのです。

井手：明兆は大徳寺本を建長寺で写したということでしたね。

谷口：その可能性は極めて高いと思っています。原本が動くたびに、その場所その場所で大事にされてきたのです。天正年間（一五七三〜九二）に豊臣秀吉が大徳寺に寄進した際には、一〇〇幅のうち六幅がすでに失われていましたが、寛永十五年（一六三八）には絵師木村徳応が補作します。明治になってからも、画家でありのちに京都と奈良の帝室博物館長となる森本後凋（こうちょう）は、一〇〇幅全てを模写しています。その後アメリカに一二幅流れてしまいますが、それを非常に悲しんで、手許にあった模写本から一二幅を複写して大徳寺に寄進するのです。南宋時代の東銭湖から移ってきて、しかもアメリカにも渡ってと、これほどま

でにその場所場所で多くの人びとにインスピレーションを与えている絵はなかなかないと思うのです。

井手：年紀を持つ銘文があることで、南宋の絵画史の基準作例となります。大徳寺本を使わずにでき上がったこれまでの南宋絵画史を修正していかなくてはなりません。南宋絵画史を研究する人はこの本を必読することになります。

●文化史の重要資料

谷口：絵画史だけではなくて、南宋の仏教文化の様相を見たときに、たとえば経蔵や経箱の様子が描かれています。ちょうどこの頃に重源上人が寧波に行っていて、重源上人が将来した一切経というのが現存しているのですが、そのお経の収納の様子を知ることができます。

井手：建築史から言っても、寺院の姿が描き込まれていますが、これは典型的な禅宗様の建物らしいのです。建築史の人たちにとっても貴重な資料になると思います。

谷口：あと文学の方で言うと、仏教説話にかかわる内容が大徳寺本にはたくさん出てくるのです。まず『西遊記』の原点になる唐僧取経説話ですね。これは大事です。猿猴侍者という、のちの説話では孫悟空になっていく猿が描かれていて、鬼と共に空を駆けています。玄奘と猿と鬼の組み合わせはほかにはないのです。仏教説話研究に今まで使われていませんが、非常に重要なものだと思います。このように大徳寺本にはいろんなイメージがちりばめられています。

　数年前にＮＨＫ大河ドラマで平清盛をやりましたが、清盛がお茶を飲む場面がありました。お茶というのも最先端の舶来もので、当時の茶器を使ってお茶を飲むのですが、その様子はこの大徳寺本の場面で考証して再現されているのです。井手先生がかかわっておられるのですよね。

井手：細かいことは忘れましたが、ＮＨＫの中国支局から電話がかかってきたので、大徳寺本に色々あるから見て下さいと言いました。

北澤：今年東京国立博物館で開催された建仁寺展の会場に、茶道の原形とされる「四頭茶会」の空間が再現されていましたが、その源流とみられるような喫茶の様子も大徳寺本に描かれています。

谷口：『喫茶養生記』を書いた栄西が入宋したのは、まさにこの頃です。日本の禅宗文化、お茶文化の源流がここにあるのです。

井手：狩野一信の五百羅漢図が最近話題になっていますが、一信は喫茶の場面はあまり描かないのですよね。

北澤：寧波展にはお茶関係者や、焼き物関係の人も多く見に来ていらっしゃいました。

井手：まだまだありますが、挙げればきりがないほど、さまざまな領域にまたがる、南宋文化に関する視覚資料の宝庫です。

（二〇一四年六月六日　於：思文閣出版）

別府大学文化財研究所企画シリーズの第三冊が刊行されます。本シリーズでは一貫して文理融合による研究成果を公表してきました。

●質量分析計のある文学部の誕生

――分析科学者の平尾先生が別府大学の文学部に赴任したきっかけは？

平尾：まったくの偶然です。わたしは現東京文化財研究所（東文研）で鉛の同位体比の研究を二十年くらいつづけていて、定年退職になりました。ちょうど同じころ、別府大学の文化財学科で文化財保存科学を担当していた教員が、急遽転出することになったのです。

飯沼：当時まだ保存科学という分野は人材が少なかったので後任について文化庁に相談したところ、平尾先生が退職することを耳にしました。従来の保存科学とは少し違ったのですが、平尾先生がくれば新たな展開を期待できると感じ、来ていただくことにしました。

――高額な計測機器はどうされたのですか？

飯沼：計測機器は平尾先生と一緒にきたわけではなくて、平尾先生は最初、比較的近い高知大学まで行って分析をしていました。先生が使っていた機器は東京で誰も使わないまま置いてあり、そういう状況が一年ほど続きました。そこでなんとか譲ってもらえないだろうかと思い交渉してみました。ただし私たちは私学であり、向こうは国の機関ですから、簡単な話ではないはずでした。でもその頃、独立行政法人への移行期で、自由な雰囲気が生まれつつありました。

平尾：独立行政法人になって間もなかったため、東文研では使わない機器をどうするのかに関して、方針が何も決まっていませんでした。それに器械を維持するためには電源をずっと入れておかねばならないので、置いておくだけでお金がかかる。そんなときにこの話が出たので、中古品を購入する形でうまく話がまとまりました。

飯沼：中古品とはいえ高額でしたが、うちの学校法人も意義を理解してくれました。しかし繊細な器械ですから、この建物は器械のために改装しましたし、エアコンだって一年中かけ続けなければならない。文系が故に維持費のことをよく考えず買ってしまった部分もあります（笑）。

平尾：この学科にとって大きかったのは、学生が器械を動かせることでした。一時代前の質量分析計は専門家でなければ動かせなかったのですが、今の機器は維持・管理はともかく、操作

てぃーたいむ

鉛の道をたどれ

――別府大学文理融合の軌跡――

ひらおよしみつ　**平尾良光**（別府大学客員教授）

いいぬまけんじ　**飯沼賢司**（同文学部教授）

自体に専門的な知識は必要ないからです。

飯沼：文学部としては通常では考えられない分析科学の機器がやってきたことで、それを文学部の学生が動かして、その結果を自分なりに考察できるようになったのです。

平尾：問題は出たデータをどう解釈するかで、それには今までのデータとの比較が必要になるので専門的な指導が必要になります。

飯沼：平尾先生が着任した時には五千点ほどのデータが蓄積されていました。先生の研究のおもしろいところは、最初の五百点や一千点の資料では比較ができないところで、つまり東文研のころはまだ蓄積の段階で、ようやく比較・分析が可能なだけのデータがそろったときに本学にきていただいたのです。その後、学生たちと四千～五千点のデータを蓄積していきました。

●文献学者と分析科学者のコラボレーション

飯沼：わたしはずっと文学部、平尾先生は理学部出身でまさに理系の道を歩んでこられました。出身も研究スタイルも全然違う私たちが一つのことについて議論するきっかけを、質量分析計が作ってくれたと思っています。わたしはもともと学際的学問を指向していましたが、さすがに理系に踏み込もうとは思っていませんでした。平尾先生との出会いは思ってもみない新しい分野との遭遇でした。当初から平尾先生と何ができるという見通しがあったわけではありませんが、話をしているうちに少なくとも二人の興味の向かう先には共有できるところがあると感じました。

――飯沼先生の中世銭についての論文は平尾先生がぶつけた疑問から生まれたのでしたね。

飯沼：平尾先生は東文研で銅製の経筒に含まれる鉛の同位体比を測定して材料の産地を分析していたのですが、あるときわたしに「一一五〇年くらいになると突然日本産の銅が消えてしまうのですが、なぜでしょうか」と質問してきました。

平尾：それまで考古学の人に何度同じ質問をしても言葉が通じませんでした。その理由は、あとになって気づいたのですが、日本で銅は古代から近世までずっと潤沢に生産されていたという概念があって、これに外れる質問には答えが返ってこなかったのです。

飯沼：わたしも当初同じように当惑したのですが、ただ、待てよと思いました。このいわば「非常識な」質問に私たちが答えられないのは、単に質問が非常識なのか、それともこれまでの常識がおかしいのか、どちらの可能性も考えなければいけないと。

実は文献史学において、平清盛が銅銭を大量に輸入したことは知られていました。しかし、その銭の利用法は何だったのかをきちんと考察した人がほとんどいなかったのです。一方、平尾先生が東文研時代に鎌倉大仏の分析をしたときに、銅銭とよく似た値を示すということが明らかになっていました。それを聞いて、もしかしたら輸入した銅銭を「銭」としてではなく銅の材料にしていたのではないかと考えました。

たとえば古代の皇朝十二銭は律令国家が崩壊していくために銭が機能しなくなった、というのが常識だったのですが、六国史な

どを見てみると材料がなくなっているという書き方をしています。製錬技術の問題で、当時は鉱山をいくら開発しても製錬可能な銅鉱石を確保できなかったようなのです。

平尾：私が鎌倉大仏を測定したときは、この大仏は銭で作ったのだろうという推定と、日本における銅の生産がなくなったという問題とが符合しなかったのです。銅生産は続いていて、その上で銭を輸入していた、そして鎌倉大仏は銭で作ったと考えるのが常識だったからです。鉛同位体比の測定だけでは、そこから先の問題に踏み込むのは難しかったのです。

飯沼：学際的学問のすごいところは、ある分野において常識に束縛され固定化されてしまっている問題を考え直すきっかけになりうるということです。

●謎の鉛鉱山の出現

――鉛の同位体比からは産地を推定できるそうですね。

平尾：鉛は産地によって同位体比が異なるので、どこの鉱山産なのかがわかります。一方、銅も同位体比の測定で産地が測定できればいいのですが、銅の同位体比には産地間の差異がないので産地を特定できないのです。

飯沼：青銅に含まれた鉛は銅の産地と密接に関係していると思われますが、銅の産地を直ちに示すものではありません。そこで鉄砲玉のような鉛製品そのものに注目しようということになりました。

平尾氏

平尾：熊本県北部の和水町に田中城という小さな出城の跡があります。二千人の反乱軍が五万人の秀吉軍に囲まれて敗れた場所だそうです。あるときそこで五六個の鉄砲玉が出土しているので測ってほしいといわれました。鉄砲玉は成分が鉛なのはわかりきっているし、大きさや形を調べても何のおもしろみもないですが、同位体比を測れば材料の産地がわかるので、とにかく測定をしました。

飯沼：それから大友宗麟の本拠跡である大友遺跡からでてきた金属製品を調べてみるとほぼ純鉛製のものが多く見つかりましたね。

平尾：ええ、同位体比を測定した結果、田中城の鉄砲玉と大友遺跡の鉛製品で同じ鉛材料が使われていたことがわかりました。

飯沼：しかもその中にはこれまで知られていなかった、未知の鉛鉱山から産出した思われる鉛が含まれていたのですね。

平尾：ええ、当時知られていた、中国産、朝鮮産、日本産といった分類の中に入らない測定値が出てきたのです。当時わたしたちはこれをN領域と名付けました。

過去のデータをきちんと見直してみると、同じ値の資料が一例だけありました。それは一五六七年の戦乱で東大寺南大門の仁王像に打ち込まれた鉄砲玉でした。

――未知の産地をどのように突き止めていったのですか？

飯沼：大友遺跡から出ているならば気になるのは南蛮交易でした。

平尾：ヨーロッパから来た南蛮船が持ってきたとすると、ヨーロッパ、アフリカ、インド、東南アジア、中国、すべてを調べてみないとわからない訳ですから、これはもう次の世代の仕事だと思っていました。ところが、たまたま知人から、カンボジアのBC五世紀～AD三世紀くらいの資料の鉛同位体比を二百～三百点ほど測って欲しいという依頼がありました。その中からN領域を示す資料が見つかったのです！

飯沼：その後、平尾先生がタイで同じ値の資料を見つけたこともあり、未知の産地はどうも東南アジアあたりかもしれないと推定するようになりました。そこで大航海時代の交易などに関する文献を見直してみると、日本に最初に来たオランダ人が家康に鉛を献上していて、その鉛は現在のタイのパタニの港で積み込んだという記録がありました。また、諸国の船が鉛をアユタヤで積み込んで日本に持ってきたという史料もありました。そうなると文献上タイが鉛を運び出した国として有力になります。

平尾：カンボジアの資料でN領域を示したのは百点中二十点くらい。タイのBC五世紀～AD二世紀の遺跡で調査すると百点のうち六十点でした。そうするとその鉛を産出する鉱山はタイである可能性がより濃厚になります。

飯沼：こうなればタイに行きたいと思い始めたのですが、海外調査をするためには費用がかかります。そこで科研費に応募したところ研究費を付けてくれて、調査を実現できることになりました。

飯沼氏

平尾：次の問題は、タイで誰に会ったら良いかでした。本来なら日本の専門家にしかるべき人を紹介してもらうべきだったのでしょうが、時間がかかりそうなので、いきなりタイの鉱山局に行ってみることにしました。

飯沼：幸運にもたまたま平尾先生がメールをやりとりした鉱山局のボラカノークさんという方がとても良い方でした。

平尾：初めてお会いしたとき、彼から「タイには東南アジア一大きな鉛鉱山があるからそこを紹介してあげよう」といわれました。さらに、「いま手許にそこの鉱石があるが持って帰るか？」というのです。それを持ち帰って計測すると、N領域のデータとぴたりと一致しました。次の年はそのソントー鉱山に連れて行ってもらいました。「ここがその鉱山」といわれた、直径一〇キロくらいの範囲から採取してきた鉛鉱石もすべて同じ値を出しました。これは奇跡としか言いようがないですよ。南蛮船の寄港地すべてを当たらなければならないと思っていたところが、一発目で正解にたどり着いてしまったのですから。

飯沼：その後の調査でタイ産の鉛は日本各地で見つかりました。鉛の遺物全体で見ると、鉄砲玉でより多く見つかっています。平尾先生は長篠合戦の古戦場に行って玉を探し出してく

るなど、鉄砲玉があると聞けば飛んで行くようになりました（笑）。

平尾：長篠では、織田側が陣を敷いた長篠城と白兵戦が行われた設楽原で鉄砲玉が合計二十個見つかり、その錆をいただきました。

飯沼：島原の乱で反乱軍が立てこもった原城跡では、一千発くらい出ています。ここは発掘中ですからもっと増えるでしょう。

平尾：島原の乱の時は、幕府軍が攻囲した四か月でおそらく十〜二十トンの鉄砲玉が打たれています。城内に残っているのは幕府軍によって打ち込まれたものだと考えられます。

飯沼：これらの玉にもタイ産の鉛は十分な数が見つかりました。

平尾：一番早い資料が一五六七年の東大寺南大門の鉄砲玉で、島原の乱が一六三七年。約一世紀の間、タイの鉛が日本に来ていたことになります。

●鉛玉が語る日本史

――それらの事実からどういった歴史が描けるのでしょうか？

飯沼：当時、日本で鉄砲玉として用いられた鉛はタイ産の他に中国産、朝鮮半島産など海外産のものが半分ほどを占めていたと考えられます。とにかく鉄砲玉に関していえば、とんでもない量の鉛が輸入されていたといえます。日本には鉛鉱山があるし、生産もされていたにもかかわらずです。

　では、なぜ日本は鉛を輸入しなければならなかったのか？　タイ産の鉛がみられるようになるのとほぼ同じ十六世紀後半、日本は世界有数の銀生産国になり、銀を中国市場にどんどん供給するようになっていました。そして日本では、銀は灰吹法という鉛を利用する製錬法で生産されていたので、銀の生産が増えれば、それに投入される鉛も増えていったわけです。当時の権力者たちは鉱山の開発に熱心でしたから、国内の鉛は多くが銀生産に振り分けられたと考えられます。一方で、鉄砲伝来以来、鉄砲玉の需要も増えていったはずです。そこで戦国大名たちは不足する鉛を輸入で補った、という推定ができるのです。その後、平尾先生はこの推定を検証しようと石見と佐渡の銀山を調査しました。

平尾：今のところ、銀山に関しては国内産の鉛を使っていたと考えています。そして推測ですが、南蛮船は鉄砲玉の材料になる鉛と火薬をセットにして売っていた。そうすれば日本の領主たちに喜ばれたはずです。だから、鉛製品全体のなかで鉄砲玉により多く外国産の鉛が使われているというデータが出るのだと思います。

　鉛の輸入の問題は、南蛮貿易はなぜ盛んに行われたのか？　という議論にもつながると考えています。非常に単純にいえば、織田信長は必要だといった。徳川家康は最後には要らないといった。これを鉛という視点から考えると、信長は鉄砲で日本を席巻しようとしたから、鉛と火薬は絶対に必要でした。もちろん陶磁器や絹織物も輸入したでしょうが、南蛮貿易のエッセンスは鉛と火薬だったと思うのです。その後、日本でも火薬の原料となる硝石を作れるようになりました。戦乱も収まり、鉄砲玉の需要も徐々に減っていきました。家康の時代に、南蛮貿易を続けて全国の大名が鉛と火薬をどんどん抱え込んだら、彼らが力を付けるこ

とになります。また島原の乱では十二万六千の兵を動員し反乱軍を鎮圧しましたが、では二回目、三回目の反乱があったとき、同じ規模の軍勢を動かす経済力・統制力を発揮できたでしょうか？こういう理解をすると島原の乱の四年後、一六四一年に幕府が鎖国を行った意味がもっと見えてくると思うのです。

飯沼：もちろん従来から指摘されているキリスト教の問題、オランダによる東アジア貿易の独占など、いくつかの要素が重なり合ったことは間違いありません。ただし、海外貿易をする限りどこからだって鉛が入ってくるのですから、幕府がその統制を意図したのは当然でしょう。平尾先生が示した見方は重要だと思います。

平尾：いろいろな見方はあるでしょうが、このような歴史が鉛を通して見えてくるというのがおもしろいと思いませんか？

飯沼：文献では、モノが港から港へ動いたことを知ることができます。でも港はあくまでも中継地で産地ではない。資料の鉛同位体比からは出土地とどこの鉱山産かがわかります。両者の情報がかみ合うと、モノの流れが全体として見えてくる。分析歴史学ともいえる手法だと思います。

――その集大成が『大航海時代の日本と金属交易』ですね。

飯沼：まさに集大成です。ここの分析器械は二十年を越していてそろそろ限界ですし、残念ながら平尾先生も七十歳を過ぎて退職される。より重要なのは器械よりも人材で、本来なら後に続く人材がどんどん出てきてほしいのですが、この分野はそう簡単ではない。何しろ東文研でも器械を扱える人がいなかったのですから。

ただし、器械がずっと東文研にあったら今お話ししたような展開はなかったでしょう。学際的とはよく聞きますが、わたしたちほどお互いの領域に踏み込んで議論をする所はないと思います。ふつう分析科学者が先ほどのように「信長はこうで家康はこうだ」なんていわないですよ（笑）。ここに来る前の平尾先生の研究は歴史とまったく関係のないものでしたよね。もともと地球の年齢を測ったという先生のもと、アメリカで研究されていたのですから。

平尾：その先生（C. Patterson）は、自分の考え方がどんどん広がっていくすごい先生でした。毎日わたしの所にきては、「平尾少し話をしよう」といって自分の考えていることをどんどん並べてくる。わたしが「それはおかしい」というと、二十歳も上なのですがそれに耳を傾けるのです。とても印象に残っていることがあって、「自分の研究は作ってはいけない、捨てるのだ。捨てていく中で残った研究が自分の研究だ」といわれました。

飯沼：わたしも思ったことはどんどん話します。そうしたなかで淘汰していく。たぶん「捨てる」というのは、しゃべりながらだめだと思ったものを落としていくことでしょう。そうやって要らないものを捨てることで新しいアイデアが出てくるのです。

この別府大学から研究機器はなくなっても、また違うテーマが出てくると思います。わたしも十年も経たないうちにここを去る日がきます。若い研究者が次のテーマを見つけてくれればよいのです。新しいことを求めて、学際的研究を続ける大学でありたいと思っています。

（二〇一四年八月五日　於：別府大学）

エッセイ

京都六角住心院

首藤善樹

院家住心院

先だって思文閣出版から、住心院所蔵文書・東京大学史料編纂所所蔵影写本・天理図書館保井文庫所蔵文書・大津市園城寺所蔵文書などを収録した『住心院文書』を刊行していただいた。長年、課題としてきた懸案の出版で、ひとまず安堵したところである。

しかし「住心院」と言っても、一般的にはあまり知られていないことであろう。現在は京都郊外の岩倉に所在するが、昭和六十三年まで洛中の東洞院六角上ルにあり、かつては六角堂の寺中でもあった。江戸時代には六角住心院として知られていた。近現代においてそれほど有名でなくなったのは、明治に修験道が弾圧されて壊滅的打撃を受けたためで、歴史的に見れば住心院は修験道本山派の代表的な院家先達として、東山若王子とならんで全国の本山修験をほぼ二分して支配する強勢な寺院であった。

本山修験の頂点に位置するのは、もちろん聖護院門跡である。聖護院は平安時代の院政期に始まり、やがて宮門跡となり、明治維新を迎えた。住心院はその聖護院門跡を脇で支える立場にあり、公家・大名家から住持が入室し、諸国の山伏を統率した。修験道史においては非常に重要な寺院なのである。

ところで、この住心院は少し複雑な歴史をたどった。開かれたのは鎌倉時代で、天台宗寺門派の有力寺院であり、聖護院の院家として宮中や室町将軍家の祈禱に参加し、また将軍家の熊野先達を勤める家でもあった。しかしやがて戦国時代に、公家社会全体が衰退するなかで住心院は中絶した。

六角勝仙院

実はその住心院とまったく別個に、六角堂の寺中として勝仙院という寺院があり、住心院から先達としての霞（一種の株）を買い取り、聖護院傘下の先達を勤めていた。戦国時代にはその勝仙院に増堅が現れ、中国地方の毛利氏や甲斐武田信玄ら、各地の戦国武将と活発に交渉し、また聖護院道澄の名代として徳川家康の分国にも下向した。徳川家康いらい、幕末に至る徳川将軍家と勝仙院の関係が築かれたのである。

さらに江戸時代初期、聖護院（照高院）興意が徳川氏から方広寺の鐘銘問題を追及されたり、当山派との確執が連続して起こっ

た難しい時期に、駿河・遠江・三河を領国とした今川氏真の子澄存が勝仙院に入り、若王子と勝仙院を二つながらに兼帯した。全国の本山修験の大半を支配する大勢力を独占したのである。

澄存は慶安五年（一六五二）、七十三歳にして隠居し江戸で没したが、その死後、あまりに大きな遺領と遺産だったので、江戸幕府が介入し、皇室・摂関家・公家衆・将軍家・大名衆などの檀那を等分に分けた上で、若王子と勝仙院の候人（こうじん）が鬮取りをして、両院家に分割したのであった。そして、その勝仙院が由緒ある住心院の名跡を継承したのである。

聖護院文書

さて私は昭和五十二年から平成二十二年にかけて、聖護院文書全一六七箱の調査を実施した。そのほとんどすべてが未調査の新史料であった。時代的には江戸時代のものが主で、内容的には大まかに門跡寺院、修験、地域関係の史料がある。

門跡寺院関係としては門主の近辺を記した「御日録」が、江戸時代中期から明治初期にわたって残存し、聖護院の内部はもちろん皇室・諸門跡・園城寺・家臣・出入りの文化人などの動きを継続的に見ることができ、もっとも基本的な史料といえる。天明八年（一七八八）の京都大火後の仮皇居関係、幕末の雄仁親王の海軍総督関係、脇門跡照高院関係など、特殊な史料もそれぞれ貴重である。

修験関係では「修験取次方日記」・「書記留」・「補任帳」などがまとまって残存し、修験道史の基本史料となっている。諸国の修験を網羅的に記した「霞帳」も、完全には揃っていないが貴重である。先達仲間の大峯・葛城嶺への入峯史料もある。明治の神仏分離関係の史料もある。

地域関係では、かつて聖護院の所領であった聖護院村や白川村の支配関係の史料、あるいは宅地開発に関する史料など、一般の歴史として貴重である。この聖護院文書の調査によって、聖護院門跡や本山修験の歴史研究の基礎的条件が整ったといえる。その一成果として、先般、『修験道聖護院史辞典』（岩田書院）を刊行したところである。

住心院文書

しかし、惜しいことに聖護院には中世文書が乏しく、中世の本山修験の姿を追えないのである。その点、住心院文書には中世の熊野先達や本山修験を研究する基礎史料が豊富に含まれている。修験道史研究において、すでに明治から住心院文書が注目されてきた所以である。また、室町時代の住心院の住持であった実意に「熊野詣日記」・「文安田楽能記」の著作があり、芸能史や文学史の方面においても注目されていることを書き添えておこう。

（聖護院史料研究所所長）

エッセイ

幕末・維新期における英式兵制

竹本知行（たけもとともゆき）

幕末期、幕府や開明的な諸藩は、自らの軍制改革に西欧の近代兵学を積極的に採り入れた。それは、清国のアヘン戦争敗北の報が衝撃をもってわが国に伝わったことで、海防という国家的課題がにわかにクローズアップされたことを直接の契機としている。

わが国における洋式兵制と言えば、当初は「オランダ式」が採用され、明治初年では「フランス式」、この後に「プロイセン式」に転換されたというような説明が一般的になされている。そして、このような説明は一応正しいといえる。しかし、ここで立ち止まって考えてみたい。そもそも、一国の兵制というものは不変の形たりえず、兵器の進歩や社会情勢の変化に伴って、絶えず更新されていくはずのものである。そのため、わが国の兵式選択においても、どこの国のシステムに倣ったかという問題に加えて、どの時代のものをモデルとしたかという点も考慮する必要がある。

さて、本稿のテーマである幕末・維新期の英式兵制についてであるが、まずは国立公文書館所蔵の「府県史料」から、全国一〇〇余藩の「兵式」の概略を見てみたい。当時、全国には約三〇〇もの藩が存在していたため、捕捉率は三分の一程度ではあるが、全体的な傾向をつかむことはできよう。それによると、慶応四年初め、和式は二四藩、蘭式は二六藩、英式は一一藩、仏式は三藩、併用一藩、不明三九藩だった。これが、明治三年初めには、和式二藩、蘭式一三藩、英式五二藩、仏式一六藩、併用四藩、不明一八藩となっている。この流れは徴兵制の導入を顧慮した明治政府（兵部省）によって陸軍の仏式統一が布告されるまで続く。

これを見ると、当初洋式兵制の主流であった蘭式はわずか二年のうちに半減し、替わって英式が、陸軍の仏式統一以前は圧倒的優位を占めたことが分かる。つまり全体的に見れば、日本の採用した洋式兵制は、蘭式から英式を経て仏式が採用されたことになる。それでは、この流れはどのような事情から形作られたのか。

幕末期、兵式選択の主要な論点は、部隊の編成や訓練をどこの国の教本に倣って行うかという点にあった。それは洋式火砲の導入とそれに対応する兵力の編成・運用を行うという現実的課題を、封建的身分秩序を維持しつつ実現しなければならないという社会的制約があったためである。

我が国の洋式兵制の嚆矢は文政年間（一八二〇年代）に長崎の

町年寄高島秋帆がオランダ人から学んで創始した高島流砲術である。これには前装滑腔銃いわゆるゲヴェールに対応した銃隊の編成・運用法である「西洋銃陣」を含んでいた。蘭式はその後、安政二（一八五五）年と安政四年からの二次にわたるオランダ海軍派遣隊による伝習を通じて幕府・諸藩に広まった。

しかし、新式の前装ライフル銃（有効射程：ゲヴェール比で約六倍）が本格的に日本に輸入される一八六〇年代になると、蘭式の採用比率は急速に低下し、替わって英式が広く採用されるようになるのである。これは何も前装ライフル銃がイギリスの専売特許品だったことを意味しない。この技術自体は一六世紀には知られており、その構造的欠陥を改良することで軍の制式銃にしたのはフランスが最初であり（一八四九年配備開始）、イギリス軍の配備はその四年後である。また、オランダ軍も同時期に同型の銃を採用し、それに合わせて歩兵操典も改定している。

蘭式の日本でのプレゼンスの急速な低下の理由はオランダの政策転換にある。オランダは、ベルギー分離後、人口と領土の大幅な減少や経済的危機と政治的不安定によって国力が著しく低下した。また、一八四八年の革命後は、自由主義政府によって陸軍兵力の大幅な削減が実行された。一八六一年の平時正規軍の常備兵力二一、七九〇名は一八六〇年の約八割減である。これとともに、財政上の観点から海上戦略も大幅に見直され、一八六五年以降、強大な海軍力の保持を放棄し、本国と植民地の沿岸防衛戦略を採った。これにより、同国海軍の日本への派遣は途絶えたのである。

銃器の更新に伴う編成の転換は教本を翻訳しただけでは困難であり、幕府や諸藩はオランダ派遣隊に代わる実地伝習を必要とした。その新たな「教師」となったのがイギリスであった。佐賀藩は元治元（一八六四）年に前装ライフル銃を採用し、同年七月に長崎に停泊していたイギリス軍艦に藩士を派遣し伝習を受け、同藩の兵制を英式に転換した。このような動きは幕府も同様で、元治元年一〇月、横浜のイギリス駐屯軍からの伝習を決定し、翌年から小銃の更新も始めている。幕府陸軍奉行は当初、オランダへの留学生派遣を幕閣に申請したが、老中が外国奉行らの評議に従って駐屯イギリス軍からの伝習を命じたといわれている。部隊の訓練には体で覚えるべき人間の動作が重要であるため、多くの人間が伝習可能な相手として駐屯イギリス軍が選ばれたのである。

産業革命を経たヴィクトリア期のイギリスがアジアに積極的に進出していたまさにその時期、オランダの海上帝国は黄昏を迎えていた。この対照的な両国の姿をわが国の幕末の「兵式」においても見ることができる。幕末期に日本にもたらされた前装ライフル銃の多くが同型の銃の中で最も完成された機種といわれたイギリス製エンフィールド銃だったことは象徴的である。そしてまた、オランダが海上帝国路線放棄を決めた第二次トルベッケ（Johan Thorbecke）内閣の海軍大臣が、日本への第二次オランダ海軍派遣隊の隊長であったカッテンディーケ（Willem van Kattendijke）だったことは歴史の皮肉といわねばなるまい。

（同志社大学法学部助教）

史料探訪 ⑤⑦

並河靖之七宝記念館
――並河靖之と京都七宝の記録――

武藤夕佳里
（並河靖之七宝記念館　主任学芸員）

明治期の七宝家・帝室技芸員　並河靖之（弘化二年・一八四五～昭和二年・一九二七）の偉業を通じて、京都七宝および日本の七宝の歴史を未来に語り継ぐために、かつて靖之が住まい七宝業を営んだ旧邸に平成一五年（二〇〇三）、並河靖之七宝記念館（以下、記念館）が開館した。館蔵品は国登録有形文化財並河靖之七宝資料、建造物、庭園も文化財であり、往時の七宝業を伝える貴重な施設となっている。

七宝は、硝子質の釉薬を金属や陶磁器を素材とした器胎に施して焼成し、研磨したもので、その起源は遙か古代の西アジアといわれている。日本へは近世初期に技法が伝わるが、技法の伝承は家系や技術者が限られ、主に建造物の飾金具、装身具、霊廟装飾などに用いられ、一般に広がるものではなかった。

幕末に尾張の梶常吉（享和三年・一八〇三～明治一六年・八三）が独力で七宝の製作技法を開発すると、庶民による七宝業が興り、日本の七宝業は明治期に急激な成長を遂げる。さらに、ドイツ人科学者、ゴットフリート・ワグネル（一八三一～九二）による西洋科学の知識も普及し、それぞれの技術者の創意工夫により、尾張、京都、東京を中心に盛んとなり、新たな時代の産業となった。

いわば当時の民間力によるベンチャー産業であり、万国博覧会などを通じ日本のものづくりの先進性を世界に知らしめ、国際的にも競争力のあるものとなった。靖之も明治維新後に他業から転身し、七宝業に未来をかけたひとりであったが、やがて日本の七宝業を世界に冠たるものとしていった。

靖之は、高岡九郎左衛門（武州川越藩京都留守居役京都詰め役人）の三男として京都に生まれ、安政二年（一八五五）に並河家の養子となり、同家が青蓮院坊官の家柄のため近侍を勤め、青蓮院宮入道尊融親王（のちの久邇宮朝彦親王）に仕える。幕末から維新期の混沌とする世情を生き抜くために、久邇宮家の家従を勤める傍ら明治六年（一八七三）から七宝業を兼業で行い、明治一一年（一八七八）にパリ万国博覧会で銀賞を受け、その年の師走に宮家を拝辞し七宝業での専業をはじめる。その後は国内外の博覧会で名声を博し、明治二六年（一八九三）には緑綬褒章、明治二九年（一八九六）に帝室技芸員となった。

明治の日本の七宝業は、「二人のナミカワ」と称された京都の並河靖之と東京の濤川惣助（弘化四年・一八四七～明治四三年・一九一〇）が目覚ましく活躍し、それぞれに有線七宝技法、無線七宝技法を究め世界を凌駕する存在となり、東西の雄が揃って帝室技芸員（惣助も明治二九年）となり、七宝は名実ともに優れた技を諸外国や後世に伝える証を授かった。

靖之が追及した有線七宝技法は、図柄の輪郭に沿って細い金属線を象り、その中に釉薬を施す古くから用いられてきた技法である。金属線が図柄を際立たせる一方で色彩が単調となりがちであったが、靖之は金属線に細く太く筆致のような変化をつけ、他種多彩な釉薬の色目による暈しを可能とした。

靖之の並河七宝は、精緻な図柄、輝き潤いある釉薬、独創的な器形が有線七宝技法と相まって、他が追随できない独創的なものとなった。とりわけ並河の黒色釉薬は評価が高く、人びとの心を惹きつけた。京都では、靖之が求心力となり京都七宝が興隆し、並河七宝が営まれた東山の三条通り白川沿い界隈に、数十軒の七宝製造所が並び賑わった。だが、七宝業は大正末期には早くも斜陽となり、その存在は瞬く間に人びとの記憶から遠のいた。

そのため記念館では、まずは靖之と並河七宝を通じて七宝を知っていただき、明治期の日本の七宝業の全容をみつめ、その歴史を将来に伝えるための研究活動も行っている。

館蔵品のうち七宝および七宝製作の道具、下画など国登録有形文化財「並河靖之七宝資料」は一六六二点、さらに当時の日記や記録簿、芳名帳などの他、各種博覧会の賞状、各職務に関わる任命状、書簡類など多様な内容を含む史料や古写真、メダルなど、靖之の足跡をみる資料が遺されている。このうち、史料的な価値を見出すことのできるものを「並河家文書」と位置づけている。

「並河家文書」には、事業や家内に関わる記録簿、芳名帳、賞状、任命状、書簡類の『貼り交ぜ屏風』などがある。記録簿は『明治四十年　日記　従未一月　並河』から『大正十年一月　日記　並河』と、『明治四十一年十一月　日誌　並河店』があり、それぞれに日々の事項が綴られている。芳名帳は二冊あり*Namikawa: Guest List*（一八九二～一九〇三年）と、*Namikawa Visitors Book*（一九〇四～三〇年）である。署名はほとんどが外国人であり、二十七年間で三〇〇〇人をはるかに超えている。『貼り交ぜ屏風』の多岐にわたる内容の書状は約三〇〇あり、屏風に仕立てたのは並河靖之自身である。

藤草花文花瓶（並河靖之七宝記念館蔵）

これまで七宝研究の主流は作品が中心で、史料研究への関心は低調であったが、筆者は並河家文書の解明なくしては明治期の日本の七宝業を知ることはできないと考え、各専門家の協力を得て文書史料の調査に着手している。

記念館は当時の工場や窯場を展示室としているが、靖之が七宝業の拡張に合わせ邸宅を改修した際に作られた庭園も往事を伝える。のちに近代庭園の先覚者として名を馳せる植治こと七代目小川治兵衛が明治二七年（一八九四）に手掛け、池には七宝の琢磨用として琵琶湖疏水の水をそそぎ入れ庭の景色ともし、水音が絶えることがなく、清々とした雰囲気と高雅さを醸しだしている。

邸宅や庭園には、「住きものをつくりたい」と願った靖之の製作への姿勢がうかがえ、海をこえて遥々と並河七宝を訪ね来る外国人客に対するもてなしが込められている。

「並河家文書」からは、世界中の人びとを魅了する七宝家、実業家、京都の名士として活躍した靖之の姿が浮かび上がり、記念館は明治に花開いた日本の七宝業を彷彿とさせる場となっている。

靖之の想いは時を越えて、今もなお記念館に訪れる人びとへのもてなしとなっている。是非とも一度、ご来館願い、靖之がみずからの七宝製作に込めた真心にふれていただきたい。遠い過去にいつしか忘れ去られてしまった明治期の日本の七宝業に、一人でも多くの方がまなざしを向けて下さる機会となれば幸いである。

並河靖之七宝記念館

京都市東山区三条通北裏白川筋東入堀池町３８８
TEL・FAX ０７５―７５２―３２７７
ホームページ　http://www8.plala.or.jp/nayspo/

— MEMO —

- 開館時間　午前10時から午後４時30分（入館は４時まで）
- 休 館 日　毎週月曜日・木曜日（祝日の場合は翌日に振替）
　夏期・冬期、長期休館あり
- 入 館 料　大人６００円、大学生・70歳以上５００円、
　高校生、中学生３００円
　＊20名以上団体割引あり

- 館 蔵 品　国登録有形文化財
- 庭　　園　京都市指定名勝
- 建 造 物　国登録有形文化財
　京都市歴史的意匠建造
　京都市景観重要建造物
　京都市歴史的風致形成建造物

秋季特別展
「並河七宝と下画」
９月６日（土）～12月14日（日）

――思文閣グループの逸品紹介――

美の縁

び　よすが

俵屋宗達は江戸の絵師である。生没年さえわからず伝記も不明とされるが、確かな作品が存在し、彼独自の特色が一貫しており、「琳派」の始祖と言われている。「琳派」という言葉はすでに世界的に通用している。絢爛豪華な様式美、現代のデザインにも通じる意匠の斬新さで、今日もなお見るものを魅了し続けている。

烏を描いたこの作品は、周りに草花も月や山といったものも配されてはいない。しかし、それ自体を単独で扱っても鑑賞に堪える存在感がある。宗達の絵の特色は一般には装飾的表現に重きをおくが、この作品を見ると、装飾化の根元には、自然界の物象の本質を捉える鋭い描写力があることがわかる。彼独自の「たらし込み」（初めに塗った墨が乾く前に濃度の異なる墨を施し、両者が混じり合う滲みの効果を活かす方法）が施されている。烏は宗達の眼を通して、聡明な知性が備わった生物として描かれている。

❖烏図❖　俵屋宗達

二〇一五年、本阿弥光悦が一六一五年に徳川家康から鷹ケ峰の地を拝領し光悦村を拓いてから四〇〇年を迎える。京都府・市では「琳派四〇〇年」として記念事業を計画している。日本が世界に誇る最上の美「琳派」の作品に出会える機会が増すであろう。

（思文閣本社営業総務・横井貴子）

書評・紹介一覧　7～9月掲載分

※(評)…書評　(紹)…紹介　(記)…記事〔敬称略〕

近代の「美術」と茶の湯
（記)「茶華道ニュース」8/1

劇場の近代化
（紹)「図書新聞」7/19

源平の時代を視る
（紹)『月刊美術』No. 467

西鶴の文芸と茶の湯
（紹)「茶華道ニュース」8/1
（紹)『淡交』8月号

死して巌根にあらば骨も也た清からん
（紹)『月刊住職』9月号

ミシンと衣服の経済史
（紹)「週刊読書人」

茶の湯　恩籟抄
（評)「茶道文化」9/1(筒井紘一)
（紹)「茶華道ニュース」9/15

『作庭記』と日本の庭園
（紹)「朝日新聞」夕刊　7/14
（紹)「京都新聞」7/20

大徳寺伝来五百羅漢図
（評)「中外日報」8/22(西谷　功)

朝鮮独立運動と東アジア
（評)『歴史評論』771号(三ツ井崇)

日仏文学・美術の交流
（評)『ふらんす』8月号(加藤靖恵)

地域社会から見る帝国日本と植民地
（紹)『歴史学研究』No. 922(佐川享平)

片桐石州茶書
（紹)『淡交』9月号

怨霊・怪異・伊勢神宮
（紹)「中外日報」9/12

元伯宗旦の研究
（紹)「茶華道ニュース」9/15

7月から9月にかけて刊行した図書

図　書　名	著　者　名	ISBN978-4-7842	本体価格	発行月
幕末期の老中と情報	佐藤隆一著	1702-1 C3021	9,500	7
軍医森鷗外のドイツ留学	武智秀夫著	1754-0 C1021	3,000	7
ジャポニスム入門(7刷)	ジャポニスム学会編	1053-4 C1070	2,800	7
元伯宗旦の研究	中村静子著	1760-1 C3076	7,800	7
ミシンと衣服の経済史	岩本真一著	1719-9 C3033	6,000	7
近江の古像	高梨純次著	1761-8 C3071	9,000	7
三河　風外本高墨蹟集	小原智司著	1763-2 C1071	3,000	8
日中演劇交流の諸相	陳凌虹著	1722-9 C3074	8,000	8
日本古代の武具	近藤好和著	1766-3 C3021	8,500	9

7月から9月にかけて刊行した継続図書

シ　リ　ー　ズ　名	配本回数	巻数	巻タイトル	ISBN978-4-7842	本体価格	発行月
住友の歴史	2	2	下巻	1762-5 C1021	1,700	8
龍谷大学仏教文化研究叢書	33	33	日本文学とその周辺	1771-7 C3091	8,400	9
東寺百合文書	11	11	チ函三	1759-5 C3321	9,500	9
陽明叢書記録文書篇	9	9	法制史料集	1716-8 C3021	12,000	9
技術と文明	36	36	19巻1号	1776-2 C3340	2,000	9

（表示価格は税別）

営業部より

▼我が家では、岡田准一を官兵衛、竹中直人を秀吉、片岡鶴太郎を小寺と呼びます。トランスフォーマーや仮面ライダーといった勧善懲悪の世界に生きている我が家の小僧は、「なんで?」とよく聞いてきます。なぜ光秀は? なぜ宇都宮氏は? あまりの頻度に「また歴史で習うから」と逃げ、就寝前「あの返答でよかったか?」自問自答してしまいます。ここは思案のしどころなのかもしれません。（江）

☆学会等出店情報

※出店学会等・出店日は変更の可能性有

・大美アートフェア（大阪美術倶楽部）
10／24（金）～26（日）
・日本思想史学会（愛知学院大学）
10／25（土）～26（日）
・史学会（東京大学）
11／8（土）～9（日）
・日本社会学会（神戸大学）
11／22（土）～23（日）
・近現代東北アジア地域史研究会（立命館大学）
12／6（日）

編集後記

▼読まず嫌いだった沢木耕太郎『深夜特急』を、ひょんなことから読み始め、はまっています。昼休みに外で読んでいると、韓国からのバックパッカー（古い?）に道を尋ねられてうれしくなったり。千年前の日宋交流もかくやあらんと、こじつけの想像はひろがります。（h）

▼別府大学のてぃーたいむは平尾先生と別府大学・飯沼先生の幸運な出会いに始まる奇跡のようなサクセス・ストーリー。文理融合研究の理想的なあり方、可能性を大いに示します。（M）

▼9月半ばの名月の夜、御所をそぞろ歩いていると、建礼門にまっすぐ延びる道の右手の森の方から、笙の音がかすかに聞こえてきた。夢かうつつか、秋の到来を感じた夜だった。（大）

▼毎回のように異常気象が叫ばれる今日この頃、とても秋らしい秋到来です。今年の新米が楽しみです。（m）

▼暑さ寒さも彼岸まで。朝夕めっきり涼しくなったこの頃は、此岸の雑事を忘れ、彼岸に逝った人たちをゆっくり偲びたいものです。（Q）

▼夏の出来事ですが、近所の夏祭りに参加しました。普段とは一変、大勢の人で賑わっており、久方ぶりに夏らしさを堪能しました。（I）

▼表紙図版：狩野永岳「四季耕作図屏風」（静岡県立美術館蔵／『風俗絵画の文化学Ⅲ』より）

おうとうつうしん
鴨東通信　四季報 No.95

2014（平成26）年9月30日発行

発　行　株式会社 思文閣出版

〒605-0089
京都市東山区元町355
tel　075-751-1781
fax　075-752-0723
e-mail　pub@shibunkaku.co.jp
http://www.shibunkaku.co.jp

表紙デザイン　鷺草デザイン事務所

■定期購読のご案内■

『鴨東通信』は年4回（4･7･9･12月）刊行しております。

代金・送料無料で刊行のつどお送りいたしますので、小社宛お申し込みください。バックナンバーも在庫のあるものについては、お送りいたします。詳細はホームページをご覧ください。

日本古代の武具
『国家珍宝帳』と正倉院の器仗

近藤好和著

【10月刊行】

『国家珍宝帳』と正倉院の器仗（武具）をそれぞれ詳細に解説し、図版編には正倉院器仗を中心に多数の写真を収録。貴重な基本文献・伝世品である両者を相関的に取り扱い、日本古代の器仗を理解するための基本図書をめざす。

内　容

序　章　**本書の視点**
第一章　**『珍宝帳』記載器仗と正倉院器仗の概要**
『珍宝帳』記載器仗の概要／正倉院器仗の概要／『珍宝帳』記載器仗の出蔵
第二章　**大　刀**
「御大刀壱佰口」／正倉院の大刀
第三章　**小刀・刀子・鉾・手鉾**
『珍宝帳』記載の小刀・刀子／正倉院の刀子・合鞘／正倉院の鉾・手鉾
第四章　**弓・靫**
「御弓壹佰張」／正倉院の弓／正倉院の靫
第五章　**靱・胡禄・箭**
靱・胡禄・箭の概要／「御箭壹佰具」／正倉院の胡禄と胡禄収納箭／正倉院の胡禄未収納箭
第六章　**甲**
古代の甲／「御甲壹佰領」／正倉院の甲
終　章
図版編／図版出典一覧

▼A5判・四七二頁／**本体八、五〇〇円**

こんどう・よしかず…一九五七年神奈川県生。一九八七年國學院大學大学院文学研究科博士課程後期単位取得満期退学。博士（文学・広島大学）

正倉院染織品の研究

尾形充彦著

宮内庁正倉院事務所で研究職技官として、一貫して染織品の整理・調査・研究に従事してきた著者による、35年にわたる研究成果。正倉院染織品研究の集大成。▼B5判・四一六頁／**本体二〇、〇〇〇円**

安祥寺資材帳

京都大学文学部日本史研究室編　**京都大学史料叢書⑰**

巻首から巻尾まで備わった貴重な9世紀の資財帳史料。現存の諸本の祖にあたる京都大学蔵本（旧観智院蔵本）を影印（写真版）で収録。釈文と解説を付す。▼A5判・一七六頁／**本体五、五〇〇円**

仁明朝史の研究

承和転換期とその周辺

角田文衞監修・古代学協会編

仁明朝史研究会の研究成果をもとに、さまざまな分野・視点から仁明朝期の画期性を解き明かす論文集。▼A5判・三五六頁／**本体七、〇〇〇円**

東寺宝物の成立過程の研究

新見康子著

南北朝時代の寺誌である『東宝記』や東寺百合文書にみられる宝物目録などの豊富な史料をもとに、東寺に残る文化財の伝来過程を具体的に体系化。▼A5判・六三四頁／**本体一二、〇〇〇円**

古文化財の科学

山﨑一雄著

古文化財の科学的研究の第一人者による成果。正倉院宝物の調査、装飾古墳等の諸報告を収録。▼A5判・三八〇頁／**本体六、三〇〇円**

日本中世の地域社会と仏教

湯之上隆著

▼A5判・三八四頁／本体八、〇〇〇円

写経や法会、開板事業、偽文書など様々な事象を通して、個人や集団の宗教行為がいかなる社会性を持ったのか、中世の地域社会における、仏教と社会との関係性を明らかにする。静岡県を中心とした地域の寺社文書の詳細紹介、紀行文から見る地域社会など、「宗教」と「地域社会」をキーワードとして古代から近代までの社会を概観する論集。

内容目次

第1篇　地域社会と経典

第1章　平安時代の写経と法会――五部大乗経をめぐって――
第2章　鎌倉期駿河府中の宗教世界
第3章　遠江国洞泉寺所蔵五部大乗経の成立と伝来
第4章　美濃国薬王寺所蔵大般若経の開板と伝来

第2篇　地域社会と寺社

第5章　覚海円成と伊豆国円成寺――鎌倉禅と女性をめぐって――
第6章　中世仏教と地方社会――六十六部聖を手がかりとして――
第7章　遠江国山名郡木原権現由来記の歴史的環境
第8章　中世後期の秋葉山と徳川家康
第9章　遠江久野氏の成立とその歴史的環境
第10章　旅日記・紀行文と地方社会
第11章　名物瀬戸の染飯をめぐる文化史
第12章　近世後期神社祭祀をめぐる争論と偽文書

余　篇

小杉楹邨の幕末・維新――近代化のなかの国学――

【10月刊行】

ゆのうえ・たかし…一九四九年鹿児島市生。九州大学大学院文学研究科史学専攻博士課程中途退学。博士（文学、九州大学）。現在、静岡大学人文社会科学部教授。

陽明叢書記録文書篇　第9輯

法制史料集

公益財団法人 陽明文庫編
杉橋隆夫・佐古愛己 解説

【10月刊行】

▼A5判・三八四頁／本体一二、〇〇〇円

摂関家筆頭である近衛家伝来の文庫襲蔵の記録及び文書中より、中世の未公刊史料を中心に影印（写真版）で刊行するシリーズ。
本輯では、陽明文庫に架蔵された中世法制史料の優品を収録し、各書の書誌および史料的位置などに関する詳細な解説を付す。

内容目次

■**法曹至要抄（三巻）〈重要文化財〉**
明法博士坂上明基（祖父の明兼とする説もある）の撰。全一七三条。

■**裁判至要抄（一巻）〈重要文化財〉**
坂上明基撰。三三箇条。

■**文永十年九月制符**
文永十年（一二七三）十一月、東大寺権僧正宗性の書写。

■**追加**
鎌倉幕府の追加法令集。追加法令集中もっとも多い実質三八八箇条を収める。

■**式目追加条々**
鎌倉幕府の追加法令集。二一九箇条。ただし末尾一一箇条は足利幕府の追加法令。

■**倭朝論鈔（一冊）**
天文五年（一五三六）二月に清原宣賢が行った講釈の内容を受講者が筆録、天文十年（一五四一）春に成書したもの。

中世寺院社会と民衆

―衆徒と馬借（ばしゃく）・神人（じにん）・河原者

下坂守著

【10月刊行予定】

中世において比叡山延暦寺が果たした歴史的役割を、同寺の活動実態とその支配下にあった京・近江の民衆との関係を中心に考察する。

山門の嗷訴の検討から、山門の「惣寺」がどのような組織と機能をもつものであったかを明らかにしたうえで、足利義満以降の武家政権との関係や、近江坂本の在地人と日吉社の大津神人が山門の活動にどのような影響を与えたかを論じ、さらには、中世都市京都の変容についても、絵画史料を駆使して明らかにする。

「王法仏法相依論」に貫かれた中世寺院社会の具体像に光を当てる一書。

【内容】

第一篇　衆徒と閉籠

中世延暦寺の大衆と「閉籠」／「山訴」の実相とその歴史的意義／中世寺院社会における身分／中世における「智証大師関係文書」の伝来

第二篇　坂本の馬借

中世・坂本の都市構造／堅田大責と坂本の馬借／坂本の馬借と土一揆

第三篇　山門と日吉社

大津神人と日吉祭／大津神人と山門衆徒／衆徒の金融と神人の金融

第四篇　中世都市・京都の変容

応仁の乱と京都／中世京都・東山の風景／中世「四条河原」考

付篇・史料紹介

『言継卿記』に見える法住寺「付論」／「岡本保望上賀茂神社興隆覚」「史料紹介」

▼A5判・四三〇頁／**本体七、五〇〇円**

しもさか・まもる…一九四八年生。大谷大学大学院文学研究科修士課程修了。日本中世専攻。博士（文学　立命館大学）。大津市史編纂室、京都国立博物館、文化庁美術学芸課、帝塚山大学人文学科、奈良大学史学科において勤務。京都国立博物館名誉館員。

東寺百合文書　第十一巻　チ函三

京都府立総合資料館編

【10月刊行】

東寺百合文書とは東寺に襲蔵されてきた奈良時代から江戸時代初期にわたる日本最大の古文書群。本史料集には「ひらかな之部」刊行中の『大日本古文書』未収録の「カタカナ之部」を翻刻。

▼A5判・四五〇頁／**本体九、五〇〇円**

住心院文書

首藤善樹・坂口太郎・青谷美羽編

全国の修験道本山派山伏を統べる聖護院門跡の院家先達、京都の住心院に現蔵される貴重な古文書や出来る限りの旧蔵文書を採集。修験道史を研究するうえで根本史料となる文書群二〇二点を活字化。

▼A5判・二三〇頁／**本体六、〇〇〇円**

日本中世の社会と寺社

細川涼一著

律宗・律僧が中世社会で果たした役割を中心に、女性や被差別民など、歴史の主流からこぼれ落ちがちなものたちへ常にまなざしを注ぎ、境界領域から歴史を問い続けてきた著者の主要な研究成果を一書にまとめる。

▼A5判・四五二頁／**本体七、七〇〇円**

中世寺院社会の研究

思文閣史学叢書

下坂守著

比叡山延暦寺を主たる対象とする。惣寺―僧侶たちによる合議―を基礎単位とした中世寺院の広がりを寺院社会として捉え、その歴史的な意味を考察。

▼A5判・五九八頁／**本体九、八〇〇円**

室町期東国社会と寺社造営

思文閣史学叢書

小森正明著

鎌倉府体制下にあった室町期の東国社会に、寺社造営事業と寺社領経済が与えた影響を考察する。「香取文書」など中世東国の「売券」の長年にわたる分析に基づく成果。

▼A5判・三五六頁／**本体七、〇〇〇円**

日本文学とその周辺

龍谷大学仏教文化研究叢書

【9月刊行】

大取一馬編

龍谷大学仏教文化研究所の研究者陣による指定研究、「龍谷大学図書館蔵中世歌書の研究」（平成二二～二五年度）において問題になった諸点や、温めてきた問題の論文を三部構成にまとめた一書。時代や分野が異なった専門領域をもつ各研究員により、研究テーマの和歌文学にとどまらず、多岐にわたる内容の論文を収録。

内　容

第一部　文学篇

日本仏教と文学（石原清志）／「草の庵を誰かたづねむ」小考（若生　哲）／『源氏物語』玉鬘十帖における紫の上の位置づけ（櫛井亜依）／『俊頼髄脳』の異名（鈴木徳男）／『嘉応二年十月九日住吉社歌合』伝本と本文考（安井重雄）／三百六十番歌合の式子内親王歌の世界（小田　剛）／藤原良経「吉野山花のふる里」考（小山順子）／源氏物語『奥入』における定家の「引歌」意識について（大取一馬）／土御門院の句題和歌（岩井宏子）／後世における『沙石集』受容の在り方と意義（加美甲多）／『源平盛衰記』と聖徳太子伝（浜畑圭吾）／常縁原撰『新古今集聞書』から幽斎増補本への道程（近藤美奈子）／不産女地獄の表現史（田村正彦）／「李陵」考（齋藤　勝）

第二部　書誌・出版篇

『和歌題林抄』古筆切の検討（続）（日比野浩信）／仏教と坊刻本仏書（万波寿子）／大田垣蓮月尼と平井家の交流について（山本廣子）

第三部　歴史・思想篇

古代尺よりみたわが上代文物（關根真隆）／藤原道長の高野山・四天王寺参詣の道程（内田美由紀）／佛光寺本『善信聖人親鸞伝絵』の神祇記述について（吉田　唯）／地下伝授の相承と変容（三輪正胤）

▼A5判・六二六頁／**本体八、四〇〇円**

おおとり・かずま…龍谷大学文学部教授

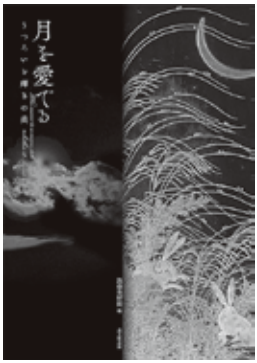
月を愛でる

うつろいと輝きの美

【10月刊行】

逸翁美術館編

二〇一四年一〇月一一日～一一月二四日に開催される、逸翁美術館特別展覧会の展示図録。「詠う」「描く」「作る」「飾る」「奏でる」をテーマに、和歌・俳句や書画・絵巻、硯箱や櫛などの工芸品から楽器にいたるまで、それぞれの世界で表現された、「月」本来の持つ自然と調和する美しさを感じられる作品七七点を紹介し、日本人が「月」に寄せた「想い」をさぐる。



内　容

〔図版解説〕
詠う
描く
作る
飾る
奏でる
〔論説〕
日本人の「月」の美学（冷泉為人）
月の美へのあこがれ（伊井春樹）
―和歌の世界における表現―
茶と月（宮井肖佳）
出品作品一覧

本阿弥光悦　和歌色紙（阪急文化財団蔵）

▼A4判・一一二頁／**本体一、〇〇〇円**

風俗絵画の文化学Ⅲ

【11月刊行予定】

瞬時をうつすフィロソフィー

松本郁代・出光佐千子・彬子女王編

▼A5判・四三四頁／**本体七、〇〇〇円**

「風俗絵画研究会」の文化学的探求の研究成果をまとめたシリーズ第三弾。

風俗絵画の歴史的な実証に留まらず、描かれた事象に織り交ざる虚実を読み解くことで、鑑賞されることを意識した美的な演出や、儀礼や慣習から生じた絵の上での約束事や仕掛け、信仰のイメージや地域に根ざした特殊な世界観などといった、人間の営為そのものの原理を探究する、哲学的思考（フィロソフィー）へと解釈を広げた一三篇。

【内　容】

瞬時をうつすフィロソフィー　出光佐千子
第1部　東西のエクリチュール
食事の情景　宮下規久朗
中華民国期の絵画における「風俗」への
まなざし　呉　孟晋
近代日本画肖像考　中野慎之
第2部　美のメディア
幕末風刺画の中の役者評判絵　倉橋正恵
上方役者絵における中判普及の背景　中野志保
円山派の美人画の展開　宮崎もも
出光美術館蔵「桜下弾弦図」をめぐる
いくつかの問題　舘野まりみ
第3部　演出のメカニズム
「古今和歌集」注釈にみる秘説の視覚性　松本郁代
「吉祥画」としての四季耕作図　吉住恭子
第4部　信仰のプラットホーム
狩野元信「釈迦堂縁起絵巻」（清涼寺）
の制作をめぐって　森　道彦
四天王寺図についての覚書　米倉迪夫
サントリー美術館蔵「日吉山王祭礼図屏風」
に見る中世の日吉祭　下坂　守

風俗絵画の文化学Ⅱ

虚実をうつす機知

松本郁代・出光佐千子・彬子女王編

絵画の制作に関わった人々の複雑に絡み合う視線の交錯を文化的に考察し、そこにあらわれた「機知」――虚実を往来する機微や感性の「かたち」――を明らかにしていく一五篇。

▼A5判・四五〇頁／**本体七、〇〇〇円**

原本『古画備考』のネットワーク

古画備考研究会編

江戸末期までの日本の絵画に関する情報をまとめた『古画備考』。その原本を徹底的に解剖し、江戸後期に大規模に繰り広げられていた古画研究ネットワークの実態を探る一七篇。

▼A5判・四九八頁／**本体九、二〇〇円**

写しの力　創造と継承のマトリクス

島尾新・彬子女王・亀田和子編

二項対立的に「オリジナル」と「コピー」を捉え、模本を原本に劣るものとして考えるのではなく、日本美術における模写の伝統をさまざまな角度から再検討する試み。

▼A5判・二七八頁／**本体四、〇〇〇円**

室町水墨画と五山文学

城市真理子著

室町中期の画僧岳翁の作品をもとに、詩画軸における詩と絵画の関係、禅林での詩画軸の制作行程、禅僧の文人意識の絵画への反映を論じ、詩文僧の〈詩画軸制作システム〉を解明。

▼A5判・三三六頁／**本体六、〇〇〇円**

源平の時代を視る

二松學舎大学学術叢書

二松學舎大学附属図書館所蔵　奈良絵本『保元物語』『平治物語』を中心に

磯水絵・小井土守敏・小山聡子編

二松學舎大学東アジア学術総合研究所での共同プロジェクトの軌跡と成果。

▼A5判・二七八頁／**本体四、八〇〇円**

識字と学びの社会史

日本におけるリテラシーの諸相

【10月刊行】

大戸安弘・八鍬友広編

近世日本の識字率は、世界的に高い水準であったということが、研究者の間でも、ある種の定説のように受けとめられているようである。しかし、本当にそうなのだろうか——。

本書では、近代学校制度が導入される以前までの、日本の識字と学びの歴史的展開とその諸相を、様々な史料から多面的に掘り起こし、実証的な検討を試みる。

地域性と個別性を意識した事例の検証が必ずしも十分とはいえない現状に一石を投じる、教育史研究者7名による気鋭の論文集。

内　容

序　論　前近代日本における識字率推定をめぐる方法論的検討　**大戸安弘・八鍬友広**

「一文不通」の平安貴族　**鈴木理恵**（広島大学大学院教育学研究科教授）

一向一揆を支えたもの　キリシタンの信仰を支えた文字文化と口頭伝承　**大戸安弘**

近世農民の自署花押と識字に関する一考察　**木村政伸**（新潟大学教育学部教授）

越前・若狭地域における近世初期の識字状況　**梅村佳代**（奈良教育大学名誉教授）

「継声館日記」にみる郷学「継声館」の教育　**八鍬友広**

武蔵国増上寺領王禅寺村における識字状況　**太田素子**（和光大学現代人間学部教授）

明治初年の識字状況　**大戸安弘**

川村　肇（獨協大学国際教養学部教授）

▼A5判・三七二頁／**本体七、〇〇〇円**

おおと・やすひろ…横浜国立大学教育人間科学部教授

やくわ・ともひろ…東北大学大学院教育学研究科教授

知の伝達メディアの歴史研究

教育史像の再構築

辻本雅史編

本書では、「教育」を「知の伝達」と捉え直し、その伝達のための媒体を「メディア」と規定することで、これまでのような、学校を中心とした教育史像ではなく、学校を含みながらも、学校を越えたところでなされる人間形成の営みを、全体として捉え直す視点を提示する。

▼A5判・三〇〇頁／**本体五、七〇〇円**

近世地域教育史の研究

木村政伸著

近世農村社会に存在した多様な内容・水準を持つ教育の構造と、その構造がいかなる社会的背景、過程を経て変容していったのかを明らかにする。

▼A5判・二九〇頁／**本体五、七〇〇円**

在村知識人の儒学

川村　肇著

近世後期の在村知識人の姿を具体的な事例によってその諸相をとりあげ、民衆の儒学が教育の近代化とどう関わっていたかを探る。

▼A5判・二七八頁／**本体六、四〇〇円**

近世私塾の研究

梅原　徹著

広瀬淡窓、本居宣長、杉田玄白、シーボルト、緒方洪庵など近世の代表的な私塾の動態と人的交流を多方面から綜合的かつ体系的に解明・分析し、その果たした役割と意義を探り、近代への胎動を追求した初の本格的な研究書。

▼A5判・六五〇頁／**本体一四、〇〇〇円**

近世の学びと遊び

竹下喜久男著

佛教大学鷹陵文化叢書10

学び・遊びの諸側面を地域との関わりを考慮しながら具体的に紹介し、身近な生活圏内に結実したさまざまな文化を明かす。

▼四六判・四二〇頁／**本体二、五〇〇円**

幕末・維新の西洋兵学と近代軍制

大村益次郎とその継承者

竹本知行著

幕末・維新の動きの中で、先人たちは国際環境に自らをどのように位置づけ、どのように西洋から兵学を受容し軍制を確立していったのか。日本という近代国家形成と国民形成の推進に大きな役割を果たした軍隊の創設の軌跡を、大村益次郎とその遺志をついだ山田顕義らの動向にたどり、その政治史上の特性を探る。

大村益次郎

【11月刊行予定】
▼A5判・三三六頁／**本体 六、三〇〇円**

【内 容】

序　章
第一章　幕末期における洋式兵学の位相
第二章　大村益次郎における西洋兵学の受容
第三章　大村益次郎における西洋兵学の実践
　―幕末
第四章　大村益次郎における西洋兵学の実践
　―明治
第五章　大村益次郎の遺訓
　――大島貞薫と大坂兵学寮の創業――
第六章　遺訓の実現――陸軍の仏式統一と
　「徴兵規則」の制定――
第七章　廃藩置県と徴兵制度の確立――「徴兵
　規則」と「徴兵令」の関係性――
第八章　「徴兵令」と山田顕義
終　章
関連年表／索引

竹本知行（たけもと・ともゆき）
1972年山口県生.
1996年同志社大学経済学部卒業. 2005年同志社大学大学院法学研究科政治学専攻博士後期課程退学. 2008年 同志社大学博士(政治学).
同志社大学法学部助教.

幕末期長州藩洋学史の研究

小川亜弥子著

幕末維新期の変革に洋学が如何なる役割を果たしたか。長州藩の洋学の実態に、軍事科学化と洋学史的側面からアプローチし、長州藩明治維新史研究の空白を埋めることをも目指す。▼A5判・二八四頁／**本体六、八〇〇円**

洋学史論考

佐藤昌介著

思文閣史学叢書

大槻玄沢・高野長英・小関三英・福沢諭吉・渡辺崋山らの諸業績の分析を通して洋学の受容と発展を解明し、近代化に果たした軍事の科学化と、軍制改革・軍楽などを論じる。▼A5判・四一〇頁／**本体七、八〇〇円**

佐久間象山と科学技術

東 徹 著

象山が入手したとする蘭書を書誌的に明かし、そこでの記載内容と象山が様々な局面で語る内容との対応関係を調査。幕末における科学技術の受容と水準を解明する。▼A5判・二八四頁／**本体七、六〇〇円**

幕末期の老中と情報

佐藤隆一著

水野忠精による風聞探索活動を中心に

水野忠精を題材とした老中の情報収集を軸に他の事例も交え、政治情報収集の実態とその内容、扱われ方を実証的に分析し、基本的な老中の情報収集ルートの枠組を明らかにする。▼A5判・五二〇頁／**本体九、五〇〇円**

明治維新期の政治文化

佐々木克編

「一九世紀における国際環境の中で、明治維新を考える」という京都大学人文科学研究所の共同研究「明治維新期の社会と情報」の研究成果。▼A5判・三九〇頁／**本体五、四〇〇円**

住友の歴史 下巻

朝尾直弘監修・住友史料館編集

【8月刊行】

近世初頭から銅の精錬を業とし、その後金融・貿易などをも手がけ、近代の財閥につながる豪商の一典型である住友の歴史をわかりやすく紹介。下巻では財閥解体までの近代史を中心に、大阪での文化貢献等にも言及。連綿と受け継がれる住友精神の源泉がここにある。

四阪島製錬所（1909年）
（住友史料館蔵）

住友総本店（北浜時代）
（住友史料館蔵）

内　容

第8章　イエの構成と組織
第9章　大名との交際
第10章　都市大坂が育んだ住友
第11章　文化と公共への貢献
第12章　幕末・明治の変革
第13章　近代化への対応
第14章　世界市場への参入

▼四六判・三二二頁／**本体　一、七〇〇円**

住友の歴史 上巻

内容

創業者の肖像／東アジアの銅貿易と住友／火と水と土石とのたたかい／鉱山都市と積出港市／銅貿易を支える仕組み／銅の生産と関連諸産業／住友の江戸進出

▼四六判・二八六頁／**本体　一、七〇〇円**

日中演劇交流の諸相

――中国近代演劇の成立――

陳凌虹著

【8月刊行】

日本の明治期、中国の清末民国初期における日中演劇界の緊密な連携関係、とりわけ中国の近代演劇の成立に果たした日本の役割について、両国話劇のはしりである文明戯（中国）と新派（日本）の関係を中心に、多数の新史料と具体的な事象（人物の往来、脚本の翻訳、舞台芸術）を通して総合的に論じる。

―内　容―

第一章　日中近代演劇の展開
近代化と演劇改良／新演劇の誕生／新演劇の担い手と享受者
第二章　新演劇のネットワーク（一）―政治・戦争と演劇の蜜月―
新演劇と自由民権運動、日清戦争／文明戯と維新変法、辛亥革命／文明戯と京都―任天知進化団と静間小次郎一派の明治座興行―
第三章　新演劇のネットワーク（二）―日中に咲くメロドラマの花―
日中に咲くメロドラマの花／「椿姫」「茶花女」「新茶花」―日中における演劇「椿姫」の上演とその意味―／「不如帰」と「家庭恩怨記」―そのメロドラマ的性格をめぐって―
第四章　舞台芸術としての新派と文明戯
役者研究―「女形」と「男旦」―／劇場研究―近代新式劇場の登場―／新演劇の統合機関―東京新派俳優組合、新劇之進会―
第五章　文明戯と日本の新劇運動―春柳社と民衆戯劇社を中心に―
春柳社と新劇／民衆戯劇社の自由劇場運動と日本

▼A5判・四一八頁／**本体八、〇〇〇円**

ちん・りょうこう…一九七九年中国雲南省生。総合研究大学院大学文化科学研究科博士課程終了。学術博士。華東師範大学専任講師。

緒方郁蔵伝
幕末蘭学者の生涯

古西義麿著

緒方郁蔵は、備中で生まれ、適塾に入門、多くの医書を翻訳。洪庵の義兄弟となり、医師として開業する傍ら、独笑軒塾を開いた。除痘館で種痘の普及に尽力し、土佐藩開成館の医局教頭や大阪医学校で教育に従事する。生誕二百周年にあたり、緒方郁蔵の生涯を、遺された著書や資料から明らかにする。

第一章　生い立ち―誕生から適塾入門まで―
生い立ち／江戸における漢学塾・昌谷精渓塾と蘭学塾・坪井信道塾／郷里における蘭学修行／緒方郁蔵の適塾時代／養子問題と洪庵との義兄弟

第二章　独笑軒塾の開塾とその展開
独笑軒塾はいつできたか／どんな人が入門したか／序痘館事業に加わる／緒方郁蔵の医学研究／医は仁術／独笑軒塾時代の出来事からみた緒方郁蔵の人となり

第三章　土佐藩の医学・洋学研究と緒方郁蔵
大坂における土佐藩の仕事／土佐本藩勤務時代

第四章　大阪医学校時代
明治天皇の行幸と病院建設／大阪仮病院（第一～二次）の開設／大阪府病院と大阪府医学校病院の開設／大名の診察／緒方郁蔵没後の緒方家／緒方郁蔵をめぐる人たち

第五章　資料
緒方郁蔵年表

こにし・よしまろ…除痘館記念室専門委員（緒方洪庵記念財団内）・橋本まちかど博物館長

【10月刊行】　▼A5判・一八〇頁　本体二、五〇〇円

緒方惟準伝
緒方家の人々とその周辺

中山沃著

自叙伝「緒方惟準先生一夕話」を軸に、著者が博捜した資料とともに生涯と交遊を詳述。幕末・明治初期の医学界をものがたる。
▼A5判・一〇一八頁／本体 一五、〇〇〇円

近代京都の施薬院

八木聖弥著

貧窮病者を救済するために安藤精軒により復興された施薬院。施薬院を中心として、京都医界の歴史を描き出す。
▼A5判・三〇四頁／本体 三、五〇〇円

京都療病院お雇い医師ショイベ
その生涯をはじめ、ほかのお雇い外国人達との交流や居留地での生活から明治初期の京都の風俗にいたるまでをよみがえらせる。

森本武利編著／滞日書簡から　酒井謙一訳

▼A5判・三四六頁／本体 七、〇〇〇円

歴史における周縁と共生
女性・穢れ・衛生

鈴木則子編

日本の歴史のなかで女性の周縁化（地位の劣化）が進行していく過程を、宗教／儀礼／穢れ／医学／衛生の側面から検討。
▼A5判・三七〇頁／本体 六、八〇〇円

医療の社会史
生・老・病・死

京都橘大学女性歴史文化研究所編

研究所の研究プロジェクトの成果。医療の社会的展開が通史的にうかがえるようにすることを企図した論文9本・コラム4本を収録。
▼A5判・三〇四頁／本体 二、八〇〇円

園城寺の仏像
第一巻 智証大師篇

園城寺 監修
園城寺の仏像編纂委員会 編

秘仏を公刊

▼A4判・一四〇頁・オールカラー／本体一二、〇〇〇円

- 園城寺及び縁の寺に所蔵される秘仏を含む仏像を網羅的に収録するシリーズ全四巻の第一巻。
- 本巻には、園城寺の秘仏（御骨大師・中尊大師）を含む智証大師像三軀と、京都府、香川県の四寺に蔵する大師像について多数のカラーカットを掲載。詳細な調書・解説を付す。
- 天台寺門宗教文化資料集成の一冊。智証大師生誕一千二百年記念出版。

国宝 木造智証大師座像（中尊大師）

11月刊行

重文 木造智証大師座像（背面）

内容目次

序（天台寺門宗管長・福家英明）

◆図版◆

国宝　木造智証大師坐像（御骨大師）　園城寺蔵
国宝　木造智証大師坐像（中尊大師）　園城寺蔵
重要文化財　木造智証大師坐像　若王寺蔵
重要文化財　木造智証大師坐像　聖護院蔵
重要文化財　木造智証大師坐像　園城寺蔵
木造智証大師坐像　香川・金倉寺蔵
香川県指定文化財　木造智証大師坐像　根香寺蔵

◆調書・解説◆

園城寺の二軀の智証大師像について（寺島典人）

【続巻配本予定】各A4判・オールカラー・一六〇～二〇〇頁
予定本体価格一四、〇〇〇円～二〇、〇〇〇円

第二巻 平安時代 一（九～十一世紀） 平成二十七年春
第三巻 平安時代 二（十二世紀） 平成二十七年秋
第四巻 鎌倉～江戸時代 平成二十八年春

近江の古像

髙梨純次著

滋賀県立琵琶湖文化館・県立近代美術館で、近江の仏像に関する展覧会の企画や調査・研究に30年以上にわたって携わってきた第一人者が、主に8世紀から11世紀の近江の古仏について、その研究成果を集大成する。

第一部　近江の仏像の成立
第一章　湖南市・善水寺金銅誕生釈迦仏立像について
第二章　長浜市木之本町・鶏足寺木心乾漆造十二神将立像の制作年代について
第三章　長浜市高月町・日吉神社木造千手観音立像をめぐって
第四章　己高山寺の草創
第五章　長浜市木之本町・鶏足寺木造十一面観音立像について

第二部　比叡山寺の仏像
第一章　円仁帰国後の延暦寺の造像について
第二章　東近江市（旧蒲生町）・梵釈寺宝冠阿弥陀如来像の制作時期
第三章　長浜市木之本町・金居原薬師堂の木造伝薬師如来立像について
第四章　石山寺木造阿弥陀如来坐像について
第五章　長浜市木之本町・石道寺の造像
第六章　甲賀市甲南町・正福寺の金剛力士像とその周辺

第三部　近江の初期神像
第一章　甲賀市・永昌寺木造地蔵菩薩立像について
第二章　栗東市・金勝寺木造僧形神像について
第三章　米原市・惣持寺の木造天部形立像について

たかなし・じゅんじ…一九五三年京都市生。滋賀県立琵琶湖文化館、滋賀県立近代美術館学芸課長を経て、現在公益財団法人秀明文化財団参事。

【8月刊行】　▼A5判・四〇〇頁／本体 九、〇〇〇円

南宋時代の仏教絵画を代表する優品

大徳寺伝来 五百羅漢図

奈良国立博物館・東京文化財研究所編

オールカラーの大型図版を高精細印刷

◎大徳寺所蔵の八二幅に、ボストン美術館とフリーア美術館（ともに米国）に所蔵される一二幅・江戸時代の補作（六幅）も含めた、現存する全百幅を高精細カラー大型図版で紹介。
◎一点一点に画題と解説を付す。
◎部分拡大図（四〇点）・絹目画像（一七〇点）も高精細カラー図版で収録。
◎最新技術・機器による今回の調査から、新たに存在が多数確認された銘文画像（四八点）を翻刻とともに掲載。
◎研究者による論文8本、伝来史料・年表・関連図版などを収録。

【6月刊行】　▼B4判・三一二頁／本体五〇、〇〇〇円

講座 日本茶の湯全史

茶の湯文化学会創立二〇周年記念出版　全三巻

近年、茶の湯の歴史的研究は、著しい展開とともに、テーマは多岐にわたり詳細をきわめている。

本講座は、日本文化史の中に位置づけられた茶の湯の展開を、茶の湯文化学会が総力をあげ、最新の研究成果をふまえて通覧する。茶の湯の成立から近代までを見通した初めての通史。

さらに深く茶の湯研究を志す人にとってのハンドブック的な要素ももたせる。

◎編集委員会◎

代表　**熊倉 功夫**（静岡文化芸術大学学長）
影山 純夫（神戸大学名誉教授）
竹内 順一（永青文庫館長）
田中 秀隆（大日本茶道学会副会長）
谷端 昭夫（湯木美術館学芸部参与）
中村 修也（文教大学教育学部教授）
中村 利則（京都造形芸術大学教授）
美濃部 仁（明治大学国際日本学部教授）

全巻完結

▼四六判・各巻 平均三三〇頁

第一巻 中世　**本体 二、五〇〇円**
第二巻 近世【6月刊行】　**本体 二、五〇〇円**
第三巻 近代　**本体 二、五〇〇円**

御茶湯之記

茶湯古典叢書六

予楽院近衞家熙の茶会記

名和修・筒井紘一・熊倉功夫監修／川崎佐知子校訂

晩年24年間の茶会記録。日付と場、客人、道具、献立を漏らさず書き控える。脚注・補注・年譜のほか解説3篇、茶人・道具・献立篇の索引も併載。

▼A5判・六一〇頁／**本体 一五、〇〇〇円**

片桐石州茶書

茶湯古典叢書七

谷晃・矢ヶ崎善太郎校訂

基本の［怡渓系］、内容が豊富な［酔翁系］、千家の立場から述べた［不白系］の三系統から底本と校合本を選び翻刻・校合。『大工之書』の翻刻も収録。

▼A5判・六五八頁／**本体 一五、五〇〇円**

茶譜　全2冊

茶湯古典叢書五

谷晃・矢ヶ崎善太郎校訂

利休・織部・遠州・宗和・宗旦のそれぞれの茶匠とその時代の茶の湯を、分野ごとに再編集したものである。全編を活字化し、挿図は別冊で全て収録。

▼A5判・総九二四頁／**本体 二〇、〇〇〇円**

元伯宗旦の研究

中村静子著

自身の茶の湯を追求し続けた宗旦の姿を、多数の史料を丁寧に読み解くことで複眼的に究明。

▼A5判・四三〇頁／**本体 七、八〇〇円**

公家茶道の研究

谷端昭夫著

近世「公家茶道」の形態、実態と特徴、茶道史における位置づけを考察。茶が持つ文化の内実を深める。

▼A5判・三九四頁／**本体 六、五〇〇円**

大美アートフェア®

DAIBI ART FAIR 美術品展示・即売会

入場無料

大阪で新・古美術品の新しい楽しみ方・求め方を提案します

美術品の魅力を発信

「あらゆる世代・全国の皆様に美術品を幅広くお伝えしていきたい」
そんな想いで2014年10月24日から3日間、全国72店の出展を頂き、
活気あるアートフェアを開催します。
どうぞ皆様のご来場をお待ちしております。

大美アートフェア実行委員会
http://www.daibi.jp/artfair

出展者一覧

数字はブース番号

関西の美術商を中心に選出された72店舗もの出展。古今東西を問わず、あらゆるアートが集います。

1-01 古美術 馬屋原	2-10 至峰堂画廊	2-25 平寿商店	2-39 茶道具商 市田朝芳庵	3-08 ギャラリー 恵寶堂
1-02 美術舗 瀧川峰晴堂	2-11 東京 池内美術	2-26 京都 宇野商店	2-40 思文閣	3-09 藤井香雲堂
1-03 (株)丹中	2-12 京都 赤坂商店	2-27 雅翔堂 塩谷	2-41 ウロコヤ	3-10 美術 天青閣
1-04 美術處 米田春香堂	2-13 古美術 おおたに	2-28 ギャラリー 帝塚山	2-43 中井竹峰堂	3-11 美術刀剣 岩本商店
1-05 谷松屋 戸田商店	2-14 寺崎商店	2-29 名古屋 梶間商店	2-44 梅田画廊	3-12 北川昭雲堂
1-06 はた古美術	2-15 京都 奥田連峯堂	2-30 瀬戸美術	2-45 善田昌運堂	3-13 前坂晴天堂
2-01 吉村	2-16 橋本画廊	2-31 大平福助堂	2-46 京都 髙野至宝堂	3-14 山田幽篁堂
2-02 (株)長谷川梅士堂	2-17 福住画廊	2-32 米近	3-01 玄海樓	3-15 丸市美術
2-03 奈良 赤井南明堂	2-18 松本松栄堂	2-33 とみや	3-02 京都 中西松豊軒	3-16 山木美術
2-04 古美術 かじ乙	2-19 ギャラリー 浅羽	2-34 御茶道具 小田商店	3-03 京都 蘇鐵庵水守	3-17 中宮画廊
2-05 奈良屋 福田商店	2-20 相模屋美術店	2-35 大阪刀剣会 吉井	3-04 圓井雅選堂	3-18 ギャラリー米田
2-06 戸田政商店	2-21 茶錦堂 髙橋	2-36 御茶道具 花田商店	3-05 茶道具商 ながさか	3-19 集雅堂
2-07 春海調古庵	2-22 樋口千古庵	2-37 三沢美術	3-06 古美術 志永堂	3-20 京都 石泉 水谷
2-08 神戸(株)柴田静楽堂	2-23 茶道具 おおにし	2-38 原古美術店	3-07 有村松雲堂	3-21 平岡美術
2-09 ヒラタアーツ	2-24 古美術 小幡			

出展者の状況は変更となる場合がございます。
詳しくは当アートフェアのホームページ[http://www.daibi.jp/artfair]をご確認ください。

2014年

10/24[金]・25[土]・26[日]

24日・25日:10-18時 / 26日:10-17時 ※入場は30分前まで

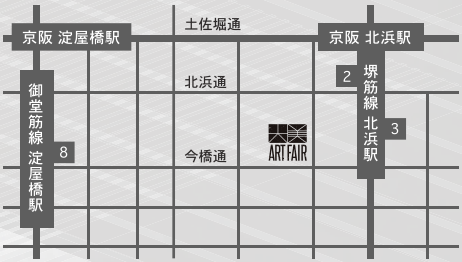
大阪美術倶楽部®

〒541-0042
大阪府大阪市中央区今橋2-4-5

お問合せ 大美アートフェア実行委員会事務局
Tel:06-6231-9626 Fax:06-6226-1848 http://www.daibi.jp

主催 大阪美術商協同組合®

協賛 ART collectors' / 月刊ギャラリー / 茶道雑誌 / 思文閣出版
小さな蕾 / 美術屋 百兵衛 / 目の眼



- 地下鉄堺筋線または京阪電車の北浜駅下車後、2番出口もしくは3番出口を出て徒歩2分
- 地下鉄御堂筋線淀屋橋駅下車後、中央改札口より8番出口を出て東へ徒歩5分

第一回
美術品展示・即売会

大美®
DAIBI
アートフェア
ART FAIR

2014年 10/24|金|・25|土|・26|日|
24日・25日:10-18時 / 26日:10-17時 ※入場は30分前まで
入場無料

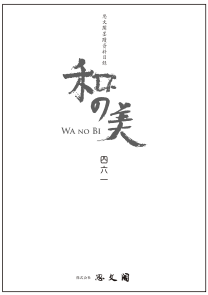
大阪美術倶楽部®
〒541-0042
大阪府大阪市中央区今橋2-4-5

ART FAIR

http://www.daibi.jp/artfair

思文閣墨蹟資料目録

和の美



古書画から
近代美術まで
毎月100点の名品を
通信販売にて
お届けします。

お電話もしくはホームページにてお問い合せください。

京都市東山区古門前通大和大路東入元町355
TEL(075)531-0001 FAX(075)531-5533
http://www.shibunkaku.co.jp/
info@shibunkaku.co.jp

大切な品を、
大切にしてくれるひとへ

美術品、納得のご売却をお手伝い

- 創業70余年 長年の実績
- 確かな審美眼
- 多様な売却方法
- 無料査定

まずは査定のお申込みを

■「査定・買取り申込フォーム」
www.satei.shibunkaku.co.jp

■「美術品査定申込アプリ」

美術品査定

〒605-0089
京都市東山区古門前通大和大路東入元町355
tel: 075-531-0001 satei@shibunkaku.co.jp

思文閣古書資料目録

※古典籍を中心に古文書・古写経・絵巻物・古地図・錦絵など、あらゆるジャンルの商品を取り扱っております（年4回程度発行）。

※ご希望の方は、下記、思文閣出版古書部までお問い合わせ下さい。

大江山 全一帖

京都市東山区古門前通大和大路東入元町355
TEL(075)752-0005 FAX(075)525-7155
http://www.shibunkaku.co.jp/kosho/
kosho@shibunkaku.co.jp

赤木明登
「茶の箱」展

平成26年10月18日(土)—31日(金)
10:00—18:00 会期中無休

ぎゃらりー思文閣

京都市東山区古門前通大和大路東入元町386
TEL(075)761-0001 gallery@shibunkaku.co.jp
www.shibunkaku.co.jp/gallery/